
魔法花栽培師メルンの物語

樹文緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法花栽培師メルンの物語

【Nコード】

N7285S

【作者名】

樹文緒

【あらすじ】

とある魔法世界に住む少女　メルンは、魔法花栽培師で魔法屋を営んでいる老人　ジェントに拾われる。

だが、ある日。ジェントの容態が悪化した。彼の治療には　魔法薬　が必要だが　夢想花^{ソルニム}と呼ばれる原料がメルンの住む世界にはないのだという。

そこでメルンはジェントの為に、異世界へと赴き、　夢想花　を採ってくることを約束する。

そうしてメルンは異世界 地球へと降り立ち、そこで 夢想花の種 を持つ少年 勇輝と出会う。だが勇輝の種 には、咲きたくても咲けない深刻な理由があった。

そんな勇輝の問題にメルンは、魔法花栽培師として接し、少しずつ勇輝の花を咲かせる手伝いをしていく。

果たして勇輝は成長を阻む問題を乗り越え、花を咲かせることは出来るのか……。

そして、メルンはジェントとの約束を果たせるのか……。

これは次元を超えて出会った、少年と少女の成長の物語 。

これは2008年9月に書いた原稿です。

今となつては珍しい、割と短めな話です。

これはこれで愛着あるネタだったりするので、いつかまた目の目を見る日がくればなーと思っっています。

本編中、ちょっと悲しい出来事が出てきますが、既出二作よりは全然グロくないので安心してください。

掲載することに時期を遡っているので、文章に違和感があったり矛盾があったりするかもですが、その辺はご容赦ください。

前置きが長くなりましたが、ではどうぞ、お楽しみくださいませ。

家族三人での買い物帰り道、メルンは空を仰ぎ、ふと疑問を懐いた。

「ねえ、パパ。あの、お空に浮かんでるのはなに？」

ショートヘアーに愛らしい髪飾りを付けた、小柄な女の子だ。年齢は六歳ほどだろうか、無邪気な笑みがとても愛らしい。

左手に繋いでいる父親の顔を見上げる。

すると父親は穏やかに微笑むと静かに口を開いた。

「あれはね、？魔法の花？だよ。メルン。 ソルニム 魔法花 って言うんだ」

「……そるにむ？」

出来る限りわかりやすく伝えたくもりなのだが、メルンは首をかしげて頭の上にハテナマークを浮かべている。

父親をフォローするように右手を繋いでいる母親が言葉を添えた。

「メルンにはまだ難しかったかしらね。大丈夫！ その内わかるわ」
そう言つて優しくウインクした。

メルンは幻想的な光景が広がる空を見上げながら、両親に手を引かれて帰路に着いたのだった。

それはメルンの心に残っている、在りし日の記憶。

やがて年を重ねるたび、世界では 魔法花 の減少が叫ばれだした。

六年後。

メルンが十二歳を迎える頃、 魔法花 はほぼ失われ 大好きな両親も失った。

そうしてメルンは

降り続ける町に

なった……。

冷たい雪が絶え間なく

放り出される事と

「1」

空に掛かる雲から振り続ける雪が、メルンの体温を容赦なく奪つ。町の人々からは 白い悪魔 と呼ばれ、恐れられている。

手にしていたお金が底を尽いてから既に三日が経っていた。衣服はすっかり薄汚れてしまい、当然ながらメルンはここ最近何も口にしていない。町の中央にある水場で、かろうじて水が飲めるくらいだ。日を重ねるごとに栄養不足が深刻な問題となっている。

「うー……おなかすいたよお……」

と言ったところでよけい空腹感に襲われるのだが、それでもメルンは声にださずにいられなかった。

切実な思いを必死に絞り出す。

おぼつかない足取りで、水場から商店街方面へと歩いている。

倒れる寸前だということは、誰よりも少女が一番よくわかっていた。

辺りを見渡しても人の気配はない。 白い悪魔 と呼ばれるほど

過酷な雪の所為で町の人たちは外出を極力控えている。

商店街に辿り着き辺りを見渡す。

何軒かの店から仄かな明かりが漏れているが扉は閉ざされている。

寒さに対抗する手段だ。

どこかの店に客がいるのか、空腹を刺激する香りが微かに漂ってきた。

メルンは香りから温かな料理を想像し、擬似的に空腹を満たす。

だが腹の虫は誤魔化せず切ない音を上げた。

少し歩き、一軒の店の前までやってきて、

「もう……だめ……」

と呟いたのを最後に意識が途絶え、深く積もった雪の上につつ伏せ

で倒れた。

絶え間なく振り続ける雪がメルンの体に積もってゆく……………。

商店街に、今となつては珍しい魔法屋がある。

店主であるジェントは、いつも通りの雪景色を眺めながら物思いに耽っていた。

半年前に原因不明の病で亡くなった孫娘のことや、店の事　そして世界のことを……………。

「……………？」

不意に店の反対側　入り口の方から、何か重たいものが落ちたような音を聞き取った。

近頃、この近辺の治安は悪化の一途を辿っている。　夢想花　と呼ばれる魔法の花が姿を消したことが原因だとジェントは思う。

希少種となった魔法屋を営むジェントの店には、　夢想花　に及ばずともいくつかの魔法の花が売られている。それを狙って不届き者たちが訪れることも珍しくはない。

ジェントは最悪の事態に備え護身用の魔法花を手に、扉をゆつくりと開いた。

「……………」

辺りを見渡すが誰も居ない。

気のせいかと思ひ直し安堵の息をつく。

扉を閉めようと視線を落とした……………その時

店の壁に寄り添うように一人の少女が倒れていた。体の半分以上が既に雪で埋まっている。

ジェントは慌てて少女を引き起こすと、店の中へ運び込み、暖炉の傍に寝かした。

こうして二人は出会った

「2」

目を開けると見慣れない天井が映った。

記憶がひどく不鮮明だ。

メルンは自分が置かれている状況を把握できないでいた。すると扉の開く音が聞こえ、一人の老人が姿を現した。

「目が覚めたかの？ しんどいようならしばらく横になっておくといい」

柔和な笑みからは老人の温かみを感じ取れた。

ゆっくりと近づき、メルンの横にある椅子に腰掛ける。

「わしはジェントという……見ての通り魔法屋じゃ。細々と生計を立てておる」

丁寧に自己紹介をしたジェントは、ズレていた毛布を慣れた手つきで直した。

メルンは消え入りそうな声で礼を述べる。

それつきり言葉はなく、ゆったりとした時間が流れた。

なんとも心地のいい静寂が場を包み込む。

時折、薪の爆ぜる音が小気味良く響いた。

タイミングを見計らってそっと口を開いた。

「おじいさんが助けてくれたの？ ありがとう。……。わたしはメルンっていうの」

そういうとジェントは微笑んで、メルンの頭を優しく撫でた。

「……メルン よく似合っておる……良い名じゃ」

大きく温かな手の感触に思わず心が安らいだ。

二人はそのまま無為な時を過ごした……………。

ジエントは空腹を訴えるメルンのために、ささやかだが温かな料理を作った。

独り暮らしが長いジエントの腕はなかなかのものだ。

「あ！ おいしい！ おいしいよ、おじいちゃん！」

「ふおつふお。そう言ってもらえると嬉しいのお。さあたくさん食べなさい」

「うん！」

その甲斐もあってメルンは体調を取り戻した。

食事を終えたメルンはジエントの仕事場を訪れた。

「ソルニムキュルテイスト魔法花栽培師？」

聞き慣れない言葉にメルンは首を傾げた。魔法花が所狭しと並ぶ調査室を物珍しそうに視線を巡らしている。

「ああ、そうじゃ。それがわしの仕事じゃよ。昔は 夢想花 がたくさん咲いておった……。今じゃすっかり姿を消してしまったがの……」

視線を落として寂しそうに呟く。

するとメルンは何かを思い出すように空中へ視線を投げた。

「…… 夢想花 ……」

どこかで聞いた覚えのある言葉を小声で反芻する。

「……。興味がありそうな顔じゃな どうじゃ、覚えてみるかの？」

意外な申し出に、メルンは笑顔で頷いた。

依然として思い出せない言葉を心の中で転がしながら……。

次の日からメルンの特訓が始まった。

ジエントは少しずつメルンに知識を授けた。

「人と人が想い合う絆が、心にある種を育てやがては世界に浸透して 夢想花 を咲かせるのじゃ。わしら栽培師はその手助けをする役割を担っておる」

そこで言葉を区切り、大きく咳を吐いて続けた。

「 想いがあっても種 がなければ 夢想花 は育たぬ……。

現代の人々にはその種 が失われておるのじゃよ……。わしはその原因を突き止め

再び言葉が途切れ、苦しそうに咳を吐いた。

「おじいちゃん……大丈夫？」

メルンは心配そうな眼差しでジエントを支えた。

「……おお。すまんな、メルン。もう……大丈夫じゃよ」

椅子にもたれかかり天井を仰いだ。

「……広大な宇宙のどこかに 夢想花 がたくさん咲き誇る惑星があると……昔、母からよく聞かされたものじゃよ」

独り言のように呟くと、そっと手を伸ばしてメルンを引き寄せた。
一瞬戸惑ったがジエントの温かな腕に抱かれすぐに身を委ねただった……。

そうした平穏な日々が半年ほど続いた。

空からは依然として雪が降り続け、人々の生活を圧迫させている。
やがてメルンの誕生日が訪れた。

「メルンや、十二歳の誕生日、おめでとう。……もしよかったですらこれを受け取ってくれんかの……」

そう言っただけでジエントは清楚な衣服を取り出した。

「わあ〜！ かわいい！」

一際高い口調で素直な気持ちの口にする。
服を受け取り嬉しそうに眺める。

「おじいちゃん、本当にもらっていいの？」

瞳を爛々と輝かせ衣服を掲げている。

「……ああ、もちろんじゃ。孫娘もきつとそれを望んでおるじ

やるつて」

半ば無意識に出た言葉にメルンが反応した。

「孫娘？」

メルンの追及する眼差しにジエントはワケを話した。

「半年前……誕生日の前日に亡くなっただんじや。次の日に渡すはずだったプレゼントが　その服なのじや……」

理由を知ったメルンはそれまでの表情を一変させ、影を落とした。

「……そんな大切なもの……もらえないよ……」
衣服の先にジエントの孫娘をみたのか、悲しげな眼差しを浮かべ、返そうとする。

だがそれはジエントに制された。

どうしてももらってほしいと願う気持ちに負け、メルンは改めてそれを受け取った。

「　ありがとう、おじいちゃん。大切にするね！」

「……すまん、そうしてくれるかの」

メルンは服を抱え込んで嬉しさを噛み締めた。

「さっそく着て見ていい？」

満面の笑みで問いかける。

「ああ、もちろんじやよ」

「じゃあ着替えてくるね！」

言うがはやくトテトテと小走りに、自分の部屋へと向っていく。

ジエントはメルンの後姿に、亡き孫娘の面影を重ね合わせていた。

「　ガッ……ア……」

胸を刺すような痛みが突然起こった。

堪らず床に片膝をつく。

メルンを心配させまいと声を殺して何度か咳をした。

痛みはすぐに消え、ジエントはなんとか自力で立ち上がった。

ほどなくしてメルンが真新しい服に身を包んで戻ってきた。

ジエントは思わず目を瞠った。

「じゃーん！ 見ておじいちゃん！ どうかかな？ かわいい？」
メルンの姿は亡くなった孫娘と見紛うほどである。
まるで天国から孫娘が戻ってきたかのような錯覚を覚え、穏やかに微笑んで一言告げた。

「ああ……とつてもかわいいよ」
メルンは温かな空気で満ちた部屋で心ゆくまで堪能したのだった。

「3」

ジェントが病気を患っていることを知ったのは、誕生日から半年後のことだった。

奇しくもメルンがジェントに助けられた時と同じ日だ。

いつものようにメルンが魔法花についての知識を教わっているときにジェントが倒れたのだ。

「おじいちゃん!？」
メルンはすぐに町の医者にも連絡を取り、ジェントを寝室へと運んだ。

痩身とはいえ大人のジェントを運ぶには小柄なメルンでは荷が重い。それでも大好きなジェントのため、必死にがんばった。

鎮痛薬を飲んだジェントは平静を取り戻した。

だが依然として辛そうな表情にメルンは不安を募らせる。

「黙っとつて……すまぬな……メルン。わしの病は少々特殊なのじやよ……。普通の薬では……痛みを和らげることが精一杯」

急に声が途切れ苦しそうな咳を吐く。

咄嗟にジェントの手を握り締め、治す方法はないのかと訊ねた。
するとジェントとは消え入りそうな声で呟いた。

「……この病を治すには……魔法薬 が必要……だが調査には
夢想花 が必要なんじゃ……この世界では最早それも叶わぬ……。
メルンや……気に病むことはない、いずれ……逃れ得ぬ運命なのじやから……」

息も絶え絶えに言葉を紡ぐ。

「…………… 夢想花 ……。人の想いが咲かせる 魔法の花……………！」

握る手に力を籠めたメルンはあることを決意した。

それは

「おじいちゃん……………わたし 夢想花 を探しに行く！……………前

に話してくれたよね？ 夢想花 がたくさん咲いてる惑星^{ほし}のこと

……………わたしは信じるよー！」

ベッドに横たわるジェントはメルンの確固たる意思を頭の中で巡らしていた。

出会いの日から一年 メルンの中で自分の存在が大きくなって
いることを感じると同時に、メルンに対して実の娘に等しい愛情を
懐いていることに改めて気付き、感慨深い眼差しを向けた。

握られた手からは異世界に対する不安よりも、憧れや好奇心が強
く感じられた。

一面を白く染め上げる雪が深深と降り注ぐ外界と同じく、静寂が
支配する部屋で、互いの息遣いだけが規則的に響いている。

まるでこの世界には二人しかいないとでも云うように、時はゆっ
くりと流れゆく。

ジェントは握った手を離すと、メルンの腕を伝って頭へ置いた。

傍にいるメルンの存在を確かめるように何度も、何度も優しく撫
でて、

「……………一年前と……………立場が逆……………じゃのお……………」

と、弱く吐いた。

するとメルンはジェントの胸に頬を重ねると囁くように言葉を紡
いだ。

「そうだね……………。だから今度はわたしが助ける番 大丈夫、怖く
ないよ。……………わたしにはおじいちゃんが教えてくれた？魔法？があ
る だから！」

切なる想いを受けたジェントの心には不思議な心地よさが生まれ
た。

自分の教えた 魔法花栽培 の知識が、少女の中でこんなにも大きく力強いものになっていることに、ジェントは言い知れぬ喜びを感じているのだ

不意に、直前まで懐いていた不安が嘘のように消え去り、決心がついた。

「……………調査室にある……………棚に……………時の花 がある……………。かつて夢想花 が咲いていた頃に……………わしが育てた花じゃ……………。それで……………惑星へ……………行けるはずじゃ……………」
数拍の間。

メルンは今の言葉を脳裏に巡らしていた。

意味を理解した途端、メルンは精一杯の力でジェントを抱きしめた。

「……………必ず……………戻ってきておくれ……………約束……………じゃ……………」
そういうとジェントは緩慢な動作で布団から右手をだして、小指を立てた。

その意味をメルンは知っていた。この家に暮らし始めた頃、ジェントが教えてくれた、なによりも強い？魔法？。

メルンは自分の小さな小指をジェントの小指と繋いだ。

そして二人は歌うように穏やかに……………

誓いの言葉を紡ぎ上げた

淀みなくも緩やかな時が二人の間に流れ続けた……………。

間もなくしてメルンは 時の花 に導かれ、広大な宇宙のどこかに在るとされる惑星へと旅立った。

見果てぬ魔法の花…………… 夢想花 を求めて

かならず帰ってくるから、心配しないで待っていてね

そう、言い残して……

【二章 病んだ世界 咲かない花 Pain Heart】

「1」

舞台は移り変わる

地球にある小さな島国 日本のとある町。

時の花 のお陰で無事、目的地に辿りついたメルンは、真つ先に感嘆の意を口にした。

「わぁ……空が……青い。 太陽がすごく……心地いい……」

静謐な空気をいっばいに吸い込み、ゆっくりとはいった。

柔らかな風が一陣 メルンを歓迎しているかのように吹き抜け、艶やかな鴉色の髪が静かに揺れる。

元の世界では味わえない感覚に浸りながら、メルンはある不安を覚えていた。

それは 夢想花 の気配がないということ。

それでもメルンはこの惑星で 夢想花 を探さないといけない。
なぜなら 時の花 を動かしていた 夢想花 の力が失われ、機能が使えなくなっているだから。

再起動するにはもう一度 夢想花 の力を注がなくてはいけない。
もう、後には退けないのだ。

「……落ち込んでる場合じゃないよね。探さなきゃ……おじいちゃん
が待ってるんだから！」

拳に力を籠めて決意を滾らせた。

メルンは澄み渡る青空を追いかけよう顔を上げて、異世界の町を駆けていった。

「……………いい……………いい加減起きろっ！」
頭上から降り注ぐ、苛立ちを孕んだ声に気付き、メルンは目を覚ました。

朧な思考をゆるやかに回転させて現状理解に努める。

眠ったような表情のまま、理解するまで数分を要した。

メルンはある後、 夢想花 に似た気配に惹かれてこの場所まで辿りついた。

だが気配の元がわからず、しばらく彷徨っていると、ジェントの調査室にあった魔法花と同じくらいキレイな花を見つけ、しばらく眺めることにした。

それがいつの間にか睡魔に襲われ、花々に抱かれるように眠りに落ちたのだった。

そこまで思い出したメルンは改めて声の主を見上げた。

学生服をソツなく着こなした、男にしては小柄な少年がメルンを睥睨している。

「……………あなたは誰？」

相手の顔をみつめたまま数秒黙し、短く問うた。

声の主である少年は、呆れを含んだ表情を浮かべて素っ気無く答えた。

「……………僕は勇輝。この中学校に通っている生徒だけど……………」

メルンは目をぱちくりさせて少年 勇輝の顔を見つめ続けている。

「ユーキ？」

少年の名を微妙な発音で呟く。

勇輝は「違う」と切り返すと、漢字を土に書き、丁寧に教えてか

ら、「そんなことより」と切り出して深い溜息を吐いた。

「お前こそ誰なんだよ？　なんでこんなところで寝ているんだ？」

矢継ぎ早に質問が浴びせられ、思わずメルンは仰け反った。

「ううっつと。……そんなに一息に言われても答えられないよ……」
不意に視線を落とすと、自分が花々の上に座っていることに気が付き、慌ててその場から離れた。

一輪ずつ丁寧に謝りながら、圧されて潰れた花を優しく持ち上げる。魔法花栽培師としての想いを籠めて……。

「……………」
メルンの行動を勇輝は静かに見守っていた。

すべての花に謝り終わると、淑やかに振り返り、穏やかな笑みを浮かべた。

「わたしはメルン。夢想花を探してるの。勇輝は知らない？
とてもキレイな花なの」

「メルン？　変な名前……。ひよっとして外人？　ま、なんでもいいか」

湧き起こった疑問を自己解決した勇輝は改めてメルンの質問を脳裏で転がした。

「そるにむ？　……………そんな花は知らない……。すくなくともここにはない。もっと別のところを探せば？　それと」

勇輝は語気を強めて言い放った。

「二度とここで寝たりするんじゃないぞ！」

ものすごい剣幕で迫られ、メルンはたじろぎながらも頷いた。

「う……………うん……………」
とびつきり大きな釘を刺すと、メルンが眠っていた場所に咲いている花へ視線を落とした。

「……………ごめんね。……………お花……………」
続く言葉を選んでいると勇輝がそれを遮った。

「別に……………いいよ……………。それに……………」

不意にそこで言葉が途切れた。

気になったメルンはそつと先を促す。

「……それに？」

すると勇輝は弾かれたように振り向くと、「なんでもねえよ！」と
言い捨ててその場から立ち去った。

メルンは走り去る勇輝の姿をしばらく見つめてから力強く咲き誇
る花々の前にしゃがみ込んだ……。

日差しが柔らかさを帯び始めた頃、メルンはまだ花を眺めていた。
自分がこの場所に導かれた原因を突き止めるためだ。

校舎をぐるっと周り、いろんな景色をその目に映してきた。

至るところに優雅な花が咲き誇っており、その都度眺めていたせ
いで、一周するだけでもかなりの時間を要した。

それでも原因を突き止めるには至らなかった。

途方にくれたメルンは、自分が眠っていた花壇の前で座っている
ことにしたのだ。

「おかしいの……確かに 夢想花 に似た気配がしたのに……」

誰にともなく呟いて、膝をかかえて顔を伏せた。

温かな風が頬を撫でると同時に、聞き覚えのある呆れを含んだ声
が耳に届いた。

「……なんだお前……あれからずっといたのか？」

「……勇輝……」

視線を向けるとそこには、くたびれたリュックを背負った勇輝が
いた。

ソツなく着こなされた服装があらゆる特徴を排しており、おそら
く一度出会ったくらいでは記憶に残らないほどだ。

僅かに口を開き答える。

「うん……」

メルンは勇輝から視線を外すと物憂げな表情を浮かべた。

「……………」

勇輝はそんなメルンを一瞥してリュックを下ろした。

黙したまま、来た方向とは逆側へ歩いていく。

メルンが座っている横線上にひとつの物置がある。勇輝は慣れた手つきで物置に掛かっている南京錠を外すと、中へと消えていった。しばらくして出てきた勇輝の手には、じょうろと軍手と栄養剤が見受けられた。

近くの蛇口からじょうろに水を汲むと、こぼさないように慎重に歩き始める。

戻ってきた勇気は、メルンが寝ていた花壇の前にしゃがみ込み作業を始めた。

メルンはその姿をしばらく見つめ続けた。

「この花々は……………勇輝が世話をしているの？」

雑草を取り除き、じょうろで水を撒きながら素っ気無く肯定した。

「……………僕、園芸部だから……………」

「えんげいぶ？ ……花を世話する人のこと？」

恵みの雨さながらに降り注ぐ水が、花びらにはじけて土を湿らせた。

花々が気持ちよさそうに寛いでいるように思える。

遅れて答えを返した。

「なんだ、園芸部も知らないのか？ ……まあそんな感じだ」

じょうろを置くと花壇の傍にあるプランターへと歩み寄る。

なにも咲いていない小さなプランターを見つめ、寂しそうな表情を浮かべた。

「その花は……………まだ咲かないの？」

不意に出てきた疑問をそっと投げかける。

勇輝は手にした栄養剤を土に差すと、まるで赤子をあやすように優しくプランターを撫でた。

数泊の間が空いた。

そこでようやくメルンの言葉が届いたのか、低い声が漏れた。

「……この花は　咲かないんだ……。僕が咲かせなきゃいけないのに……」

勇輝の声はとても悲しいものに聞こえた。

「……………」

メルンにはかける言葉が思いつかなかった。

校舎中の花壇を一通り世話し終わると、道具を片付けて物置の鍵を閉めた。

そして覇気のない足取りで歩き、花壇の前で座っているメルンの前までやって来ると、

「……遅くならないうちに帰れよ」

と声をかけて学校を後にした。

メルンは去っていく勇輝の姿に不思議な感覚を覚えていた……。

「2」

メルンがこの世界に来て二度目の朝が訪れた。

あれから　夢想花　の気配を探したメルンだが、結局は手がかりが見つからないまま眠りに落ちたのだ。

暖かな気候のお陰で安らかに眠ることが出来たメルンは、朝陽を浴びて目を覚ました。

「ん……んん……。ふにゃあ……………」

子猫のような声を上げて大きく伸びをする。

元の世界ではほとんど降り注ぐことのない太陽の光を、メルンは心から喜んだ。

「これが太陽の温もりなんだね……。これほど温かな光に満ち溢れているんだから、どこかにきつと……。夢想花　が咲いてるよね」

自身を励ますようにメルンは呟いた。

やがて人が現れ始め、瞬く間に喧騒が生まれた。

それぞれ同じ服に身を包んだ、自分と同じくらいの年の子供が、

元氣よく校舎へと入っていく。

不意に 夢想花 に似た気配を感じ視線を巡らせると、メルンは人込みの中から見慣れた顔を見つけた。

「……………」

間の抜けた声が零れた。

視線の先に見つけたのはメルンが初めて出会った少年 勇輝だった。

少年が近くにいるときに 夢想花 に似た気配を感じていることに、メルンはまだ気付いていない。

「……………」

目が合った。

勇輝は周囲の注意を引かぬように気を配りながら近づいてきた。

「なんだおまえ……………もしかして一晩中ここにいたのか？ 帰れって言っただろ」

別段声を荒げるでもなく、淡々と告げた。

声には昨日と同じ呆れが含まれている。

だが特に気にする様子はない。

「うん、そうだよ！ この世界はお日様が暖かくて気持ちいいね！」
「ッ！」

メルンの無邪気な笑顔に、勇輝は声を失った。

不可解な鼓動の高鳴りを抑えて平静を装う。

「太陽がそんなに珍しいのか？ まるで雪国の人のような言葉だな」

途端に複雑な表情を浮かべたメルンはおもむろに口を開いた。

「そうだよ。わたしの世界はほぼ一年中……………雪が降ってるの……………」
「一年中？ どの国だ？ 何？ 世界？ ……まあいいや」

短く息をつくと何度か周囲に視線を飛ばして状況を確認する。

「……………先生に見つかったら何かと面倒だから、とりあえず帰れ」
「……………ダメ……………帰れないの。 夢想花 を見つけるまでは……………」

固く拳を握り、決意を露わにする。

「そるにむ？ 昨日も言ったけどそんな花は聞いたことないよ。

外国の花とかなんじゃないか？」

色よくない返事にメルンはしゅんと頂垂れた。

妙に重たい空気が二人を包み込む。

沈黙を破ったのは機械的な鐘の音だった。

「……あ、予鈴だ。……僕はこれから授業にでなきゃいけないから構ってあげられない。 おまえは先生に見つかる前に帰れよ。…

…分かったな！」

ぶつきらぼうに言い放つと踵を返した。

「……じゅぎょう？」

あどけない声が背後から聞こえた。

そこでなぜ足を止めたのか……自分でも不思議に思った。

「……授業も知らないのか？ 本当にどこの国から来たんだよ……。授業つてのは勉強することだ。？勉強？ は分かるか？」

勇輝の言葉を受け、メルンはとびっきりの笑顔を咲かせた。

「うん！ それならわかるよ 私と同じだね！」

「え？ ……ああ、留学生ってやつか？ おまえは何を勉強してるんだ？」

問いかけた瞬間、不意に木々が揺れて葉音を奏でる。

メルンは笑顔のまま大きく息を吸って快活に答えた。

「わたしは 魔法花栽培師なの」

不思議な言葉の響きに、勇輝は言い知れぬ感覚に包まれていた。

何を喋るでもなく、ただ少女の姿を見つめる。

そして二度目の鐘が響くと同時に、慌てて駆け出した……。

幾度目かの鐘が高らかと鳴り響いた。

陽は和らぎ、こころなしか冷たくなつた風が静かに吹き抜ける。

メルンはジェントと出会うまでに染み付いた習慣のお陰で、水を得るのには苦勞しなかつた。

勇輝が世話をしている花壇から右手へ 園芸道具が仕舞つてある物置の向かい側に水場を見つけた。

最初それを目にした時は何か分からなかつたが、とある子供が栓を捻つて水を出しているところを目撃することで判明した。

改めて思い返せば久しく水を飲んでいないことに気付いたのだ。なんだか寂しいような懐かしいような感覚を懐きながら、メルンは見た通りに栓を捻り水を出した。

滾々と湧き出る水にちいさな口を近づける。眠るように水を飲むその姿には、どこか淑やかさが漂う。

ポケットから柔らかかそうなハンカチを取り出し口を拭く。

水を飲んだことでおなか站了起来のか、思い出したように切ない音上げた。

決して裕福でないものの、ジェントに拾われてからは空腹で困ることはなくなつた。そのありがたみを再認識したメルンは決意を新たにした。

「うう……おなかへつたよお……」

だが、残念ながら水と決意だけでは おなかかふくれることは無かつた……。

水場から、既に定位置となつた花壇の前まで戻つてきたメルンは木陰に座り込み、自分がこの場所へ辿り着いたときのことを思い返していた。

夢想花 の気配が感じられない一方で、それに似た気配に導か

れ、いつの間にか花壇の中で眠ってしまっていた。

だが感じた気配は花壇からではない。わずかに移ってはいるが微妙たるものだ。

「うーん……何でかなあ……」

ありつたけの疑問を含ませて独り呟く。

美しく咲き誇る花々を撫でてから隣にあるプランターへ視線を落とした。

勇輝が寂しい表情で「咲かないんだ」と呟いた言葉が脳裏に響いた。

「……勇輝……悲しそうだった」

思い出せば思い出すほど、メルンの中でひとつの想いが募ってゆく。その根底にはジエントの教えがあった。

「わたしが勇輝の笑顔を取り戻してあげなきゃ 魔法花栽培師として！」

募った想いが決意となつて表れた瞬間だ。

一度勇輝と話しをしようと、勢いよく立ち上がる。

すると校舎から数人の生徒が出てきた。

見つかったら騒ぎになるといふ勇輝の忠告を守り、大樹の陰に身を隠す。

するとその中に見知った顔を見つけた。

もちろん勇輝だ。

いつもと違い一人の男子生徒と歩いている。

「……勇輝？」

メルンの目には心なしか怯えているように映った。

勇輝とその男の子は、足早に正門へと向っている。

花壇の方にメルンがいることを知ってるはずなのに、勇輝は一度も視線を見ることはなかった。

只ならぬ雰囲気にメルンは胸を締め付けられていた。心配をよそに男の子は勇輝を連れて学校を後にした。

居た堪れなくなったメルンはその後を追ったのだった。

しばらく歩いて近くの公園に辿りついた。

住宅街から離れている上に時間が早いせいか、公園には人影はな
く静かなものだ。

メルンは公園の入り口から様子を窺うことにした。
すると勇輝を睥睨している男の子が声を張り上げた。

距離が遠いのでメルンには内容は聞き取れないが、雰囲気から穏
便な内容ではないことが計り知れる。

怒号が浴びせられる度に勇輝は肩を小刻みに震わせている。
飛び出したい気持ちとは裏腹に、どうしても足が動かない。

歯痒さに拳を握り締め、その光景を見守る。

すると遂に男の子が勇輝の腹部を容赦なく蹴り上げた。苦悶に表
情を歪ませ地に片膝を着く。

立て続けに蹴りを放つ。傷を目立たせないためか執拗に腹部を狙
っている。

堪えきれなくなった勇輝は地面にうずくまった。

反応がなくなったことに機嫌を悪くしたのか、男の子はまるでゴ
ミのように勇輝を蹴り続ける。

既に声すら出ない。

勇輝は必死に息を吸おうとするが思うように呼吸が出来ずむせ返
している。

「……勇輝、ごめんね」

目の前で打ちのめされている勇輝に対し、届かない謝罪を口にし
た。

勇輝に対する暴力は数十分に及んだ。

ようやく飽きたのか、最後に言葉を吐き捨てて踵を返した。

メルンは慌てて公園の角まで避難して男の子をやりすごした。

立ち去ったことを確認して恐る恐る近づく。

公園の中央に蹲っている勇輝が視界に入った瞬間、メルンは全速力で駆け寄った。

体を起こして支えながら、

「勇輝！ 大丈夫！？ しっかりして！」

と必死に呼びかける。

無意識に握った手から苦しさが伝わってくるような気がした。

「……お前……どうして……ここに……？」

息も絶え絶えだ。

勇輝の問いにメルンは答えずに見つめ続けている。

「……はは……見られちゃったか……分かったら……これが僕なんだ……」

沈むように低く 暗く呟く。

「ッ！」

その時、メルンは勇輝の心に 夢想花 の 蕾 を見た。

だが 蕾 には一際大きな蔦が絡まっている。

手を離すと同時に消えてしまいそうなくらい微弱な気配に、メルンは表情を曇らせた。

（これなの！ わたしが感じた気配……だけどこれじゃ……）

間に合わない

そんな不安が脳裏をよぎった。

腕の中で苦しそうな声を上げている勇輝の姿を見て、メルンは思考を巡らす。

わたしは何のために勇輝のあとを追ってきたのか

悲しい顔をしている勇輝の笑顔を取り戻すためではなかった

のか

仮に勇輝の 蕾 を見放して、他に当てはあるのか

大好きなジェントの教えはどこにいったのか ……

(私が咲かせなきゃ……魔法花栽培師として ツ！)

刹那、メルンの意思が揺ぎ無いものになった。

「勇輝……もう平気だよ。わたしが勇輝の笑顔を取り戻して見せるからね」

「……お前……何を言ってる……ぐっ……」

起き上がろうとして痛みを呻いた。

強く握った手に想いを籠め、勇輝の体を支えて、

「まだ動かない方がいいわ……。ケガ……。痛そうなの……」
傷を優しく撫でながら囁く。

メルンの小さな手に勇輝は安らぎを覚えていた。

「……うん……ごめん」

瞳を閉じて眠るように言葉を紡いだ。

メルンは増え始めた人目を避けようと落ち着ける場所を考えた。

だが満足に土地の事を知らないメルンは学校しか思いつかず、勇輝を抱えて公園を後にした。

学校に辿りついた頃には部活はすでに終わっており、校内には静寂が降り始めていた。事務処理のために残っている先生に見つからないよう、花壇の前まで歩を進める。

大樹に勇輝を凭れかけさせて自分もその隣に腰を下ろす。

男子生徒達に容赦なく痛めつけられ、心身ともに疲労しているのだろう……勇輝は静かな寝息を立てている。

柔らかな風が心地よく頬を撫でた。

それはまるで勇輝の傷を癒す風のようにも思えた。

しばらくして目を覚ました勇輝は、メルンと一緒に空が茜色に染まるまで穏やかなひとときを過ごした。

メルンは勇輝の横顔を一瞥し、元の世界で自分の帰りを待つジェントに想いを馳せ、憂いの表情を浮かべた 次の瞬間

切ない空腹音が静寂の中に響き渡り、メルンはそのまま眠るよ

うに倒れた。

突然の事態に勇輝は慌ててメルンを抱えて起こす。

「お、おい！？ どうした！？」

「……お」

「お？」

紡がれようとしている言葉を聞き取るうと耳を澄ますと、寝言のような囁き声がメルンの小さな口から零れた。

「おなか……すいたよお……」

メルンにとっては切実な問題なのだが、まったく違うことを予想していた勇輝は思わず安堵の溜息をついた。

「ハ………ハハ………なんだ………驚かすなよな………」

すでに眠っているメルンに対してそう呟く。あどけない寝顔を見つめ、返事を待つように黙している。

しばらくして勇輝はおもむろに少女を背負うと学校を後にして、夕暮れに染まる道に向かって歩き出した。

背中で眠る少女の寝息と心地よい鼓動を感じながら

「3」

帰路の途中にすれ違う誰もが穏やかな微笑みを向けてきた。どうやら兄妹のように思われているのだろうと勇輝は考えた。一人っ子の自分には無縁だと思っていた感覚に戸惑いを覚える。

メルンを背負ってる関係で家に着くまで普段の倍近い時間が掛かった。

住宅街に入った途端、各家庭から夕食と思われる香りが漂ってくる。焼き魚やカレー、煮込み料理と実に様々な匂いに勇輝は堪らずおなかを鳴らした。

「……いいにおい……」

不意にメルンが目を覚まし、美味しそうな匂いに鼻を動かす。

「起きたのか？ もうすぐ僕の家に着く　そこでたつぷりとごはんを食べさせてやるよ。……あと少し我慢しろよな」

感情がでないよう努めて話しかける。

「……うん……。ごめんね、勇輝……。ありがとう」

前触れなく紡がれたありのままの言葉に、勇輝の頬が反射的に紅潮した。

「そんな……お礼なんて……」

むしろ言わなきゃいけないのは僕の方

という思いは胸に留め、メルンに悟られないように黙々と歩き続け、ほどなくして家に到着した。玄関先でメルンを下ろすと手を引いて扉を開けた。

「ただいま」

抑揚のない声で短く言葉を投げる。

すると家の奥から明瞭な返事が返ってきた。

「おかえり、ゆーちゃん。今日はどうしたの？　遅かったわね」

喋りながら出てきた恭子は、勇輝の背後に見慣れない少女の姿を見つげ言葉を止めた。

じつとメルンを見つめている。

「母さん……あ、あの……」

事情を説明しようとするがうまくいかず口籠ってしまふ。

そんな勇輝の気持ちを知ってか知らずか、恭子の口から声が零れた。

「か」

「か？」

同じ音を口にした次の瞬間

「可愛いイイイイイイイイイイイイ……」

「ッ!?」

突拍子のない悲鳴を上げた恭子は勇輝を払いのけ、獲物を捕捉した猛獣のごとき機敏さでメルンを抱き締めた。

「え!? え!?」

状況が把握できないメルンは恭子の胸の中でうろたえるばかりだ。勇輝はそんな母親の様子を見て短く溜息をついた。

「はぁ……可愛いもの好きも、ここまで来ると病気と変わらないな……」

視線を振るとメルンが助けを訴えるような眼差しを向けている。

「……ああ、悪い」

暢気に傍観していたことを詫びると勇輝は恭子をメルンから引き離した。

「母さん! 突然抱きついたりしたらビックリするだろ」

正気に戻った恭子は惜しみながら腕を解くと、エプロンの乱れを直してうっとりとした笑顔を浮かべた。

「クセなの、ごめんね えーと……」

恭子の抱擁から解放されたメルンは「ふう」と息をつき、お気に入りの服を可憐に持ち上げ、

「メルン。わたしの名前はメルンなの」

と、行儀よく名乗った。

恭子は「メルンちゃんか……素敵な名前ね」と返し笑顔を浮かべる。

「母さん、この子……おなか空かせてるみたいなんだ」

さり気なく本来の用件を明かすと、その心を見透かすように瞳を見つめ静かに問いかける。

「何があつたのか知らないけど……ゆーちゃんにとって大切な人
そうね?」

勇輝は恭子の目をから視線を外さずに頷いた。

「分かったわ」

短く相槌を打つと恭子は台所へ向かって歩き出した。

「ごはんだったわよね？ もうすぐできるから先に着替えてきなさい。メルンちゃんはこっちで、先に手を洗いましょうね」

前半と後半では明らかに声のトーンが違う。

またいつ爆発するかわからない恭子の？クセ？に不安を覚えつつ、勇輝は二階にある自分の部屋へと向かった。

「あ、は……はい」

メルンの戸惑った声を階下に聞きながら勇輝は階段を上がった。

間もなくして完成した夕食を、勇輝と恭子の三人で囲むこととなった。

メルンが料理を一口食べた瞬間、一際高い声が食卓に花咲いた。

「わぁ！ すごくおいしい！」

「あら。ありがとう、メルンちゃん！」

「……そうか？ 普通の肉じゃがだと思
などという感想は恭子の鋭い視線によって制され、慌てて口を噤む。

「あはは」

メルンは二人のやりとりに笑いが零れ、談笑が絶えず心安らく雰囲気になりし日の光景を重ね合わせた。

太陽のように温かな笑顔が大好きだった母親と……

大地のように広い心が頼もしかった父親との思い出……。

不意に、自然と涙が頬を伝い雫となってテーブルに弾けた。

「……メルンちゃん？」

突然の変化に恭子が心配そうな声を掛ける。

それでもメルンの涙は止まることはない。

「…………ごめんなさい……。ちょっと昔の…………ママとパパがいたときのことを思い出してたの…………もう大丈夫…………だから…………」
嗚咽交じりに呟いた。

大丈夫と言いつつも未だに涙を浮かべているメルンの顔を、恭子は優しく抱きしめた。それはまるで本当の親子であるかのように映った。

勇輝はそんな他愛ない光景を眺めながら食事を続けた。

それから十五分後

「ごちそうさま！」

メルンの快活な声が食卓に響いた。

「あら？ もういいの？ おかわりもできるのよ？」

恭子が気遣って言葉を掛ける。だがその申し出をメルンは丁重に断った。

「ううん。大丈夫。もうおなかいっぱい　すごくおいしかったの」
その屈託のない笑顔に恭子は「そう。それは良かったわ」と答えた。

「ごちそうさま」

続いて勇輝が食事を終わると足早に食卓を後にした。

恭子の呼び止めにも構わず階段を上がっていく。メルンは何かを訴えるように恭子へと視線を向けた。

「メルンちゃん　勇輝をお願いね」

という力強い後押しに、メルンはしっかりとした足取りで勇輝の部屋へと向かっていった。

ひとりとなった食卓で恭子は静かに天井を仰ぎ、

「…………勇輝…………まだ傷は癒えていないのね…………」
と悲しみを含ませて呟いたのだった。

「勇輝？」

「……おまえか。……いいよ、入っても」

抑揚のない声がドアの向こうから聞こえ、メルンはノブを回して中へと入った。

部屋の中は電灯が点いているのにも関わらず心なしか薄暗く感じた。調度品は必要最低限しかなく極めて質素だ。

勇輝は椅子に座り、なにやら本を読んでいる。

ドアを閉めて少しずつ近付くと、どうやら植物に関する本だと分かった。

「……お花の本？」

妨げにならない程度に問い掛ける。

「……うん。……昨日話したたる……咲かない花のこと……。僕はどうしてもあの花を咲かせたいんだ……。そのためにはたくさん知識が必要なんだ」

メルンの脳裏には花壇の傍にある小さなプランターが鮮明に思い出していた。

「……咲くといいね」

多くは語らず、短く本心を口にした。

その言葉に勇輝は「ありがとう」と返した。

淀んだ空気を振り払おうと、メルンは快活な口調で話し始めた。

「わたしたちってなんだか似てるね！」

「なっ！？ ……なんだよ急に……。 ……痛え……」

予期せぬ発言に動揺した勇輝は、そのはずみで手にしていた本を落とした。足の指に直撃して激痛に顔を歪める。

「わ……痛そう……」

おそらく同情しているのだろうが、どこか他人事のように呟く。

「勇輝はお花を育ててる！ わたしもお花を育ててる！ ……ほら

！ ……一緒なの！」

裏表のない笑顔を湛えて得意気に宣言する。

勇輝は痛む指をさすりながら、「そうだ」と切り出した。

「そういえばおまえ……さつきなんか言ってたよな？ 魔法花ソルニム

……なんだっけ？」

するとメルンは穏やかに微笑んで

「魔法花栽培師！ それがわたしのお仕事なの！」

と、ハツキリ答えた。

勇輝は複雑な表情で言葉を返した。

「……花を育ててるっていったよな？ 一体どんな花を育ててるんだ？」

「わたしたちが育てるのは？ 魔法の花？ なの。その中で最も強い力を秘めているのが 夢想花 ……わたしはそれを探すためにこの世界に来たの……」

そこで勇輝はメルンと出会った時から引つかかっていた疑問を改めて口にした。

「？ 魔法の花？？ ……？ この世界？？ ……もしかしておまえは

……」

「わたしはこの世界の人間じゃないの 魔法が？ 花？ として咲き誇る……ここから遙か彼方にある世界から来たの」

予感が確信へと至った瞬間 勇輝は言い知れぬ感覚を覚えていた。

目を睨りメルンを見つめる。

「……… だったらなんで言葉が通じるんだ？ まさかおまえの世界では？ 日本語？ を使っているなんていわないだろうな？」

勇輝の問いにメルンは胸に付けている花に指を触れた。

ブローチだと思っていたそれは？ 魔法の花？ なのだとメルンは静かに囁いた。

「………これね 言花シユブラ っていうの。これがあればどの世界の言葉も話せるし、簡単な文字なら書けるようになるの」

「………それが………？ 魔法の花？」

勇輝は決して異世界の存在を信じているわけではないが、今回はかりは自然と信じる事が出来た。

それはメルンが言うようにお互いに共通点があるからだろうかと思いを巡らした。

二人の間に落ちた沈黙を先に破ったのはメルンだった。

「……両親はわたしが十一歳の時に居なくなつたの。それから数ヶ月町を彷徨い、そして ジェントおじいちゃんに助けられたの」記憶を辿るように自分のことを話し始めた。

どうやらメルンを助けたジェントの病気が悪化し、治すには魔法薬が必要だという。魔法薬の調査にはメルンが探している魔法の花

夢想花 が不可欠なのだとして深刻な面持ちで告げた。

思ったより切実な話に勇輝は生唾を飲み込んだ。

大体の経緯を把握したところでもうひとつの疑問を投げかけた。

「……つてことは早く 夢想花 を見つけないといけないんだろ？ こんなところで ましてや僕にかまつてる場合じゃないんじゃない？」

その瞬間メルンの表情が曇った。

視線を落として悲しげな空気を漂わせる。

「……ここには無数の 夢想花 が咲き誇っているとわかれていたの……だからすぐに見つかると思っていたわ けど、実際は違つた。この世界に降り立った瞬間…… 夢想花 の気配が感じられなかつたの……」

メルンに去来した虚無感は何れほどのものだったのだろうか……勇輝には計り知れなかつた。

「……この世界に 夢想花 が？ 悪いけどそんな話は聞いたことがないな」

なるべく穏やかに伝え、不意に言葉を投げた。

「おまえの世界はどんな所なんだ？ 以前は 夢想花 が咲いていたんだろ？」

問われたメルンは天井を仰ぎ、遠き異世界に思いを馳せて静かに口を開いた。

「……わたしが小さかつたころはまだ 夢想花 が咲いていたわ。」

空にはこの世界と同じように太陽が輝いていた……誰もが温かな心を持ち、想いを繋ぎ合って穏やかに暮らしていたの。それがある日を境に 夢想花 は失われた……。今となっては年中雪が降り注ぐ過酷な世界になってしまったの」

話が終わりに向うにつれ声が低く 小さくなっていく。

「おまえの世界は温かいんだな。この世界では想いを繋ぐことなんて出来ないよ みんな病んでるんだ。だから…… 夢想花 なんて咲かないよ……」

思ったことをそのまま口にする。

言ったあとで勇輝は少し後悔した。

ただでさえ落ち込んでいるメルンがさらに落ち込んだのではないか だが返ってきた反応は予想を裏切った。

「咲くよ！ 勇輝は気付いてないかもしれないけど…… 勇輝の中には 夢想花 の 蕾 があるんだよ！」

「え？ 蕾 ……が僕の中に……？」

声に出してみたが勇輝には実感がなかった。

自分の中で何度か転がしてみても結果は同じだった。

「なんで僕の中に 蕾 があるんだ？」
当然の疑問だ。

こんなにも人で溢れ返っている世界で、なぜ自分なのか……他の人には 蕾 はないのか……様々な思いが交錯する。

「……探せばきつと…… 勇輝以外にも 蕾 を持っている人はいると思う。けど、勇輝からはすぐく温かな想いが感じられたの……」

その気配に導かれて わたしはあの場所に辿りついた……」

勇輝はメルンと初めて出会ったときのことを思い出した。大切な花壇の中で眠っていた少女の姿を……。

普通なら容赦なく追い出しているところだが、不思議とそんな気分にはならなかったのだ。

「……どうして僕にこだわるんだ？ 探せば……もしかしたら 夢想花 自体が見つかるとも知れないんだろ？ だったら」

言い終えるより早くメルンが声を上げた。

「時間がないの！ それに……」

言いながら拳を強く握り締める。

メルンは呼吸を整えて言葉を継いだ。

「勇輝の 蕾 が……すごく寂しそうで……それでいて誰かを想う強い心が感じられたから……」

「ッ!？」

思わぬ一言に勇輝は驚きを露わにした。

まるで心の中を見透かされたかのような それでいて救われたような言葉に、勇輝は言い知れぬ感覚を覚えた。

床を見つめながら考えを整理して、ゆっくりと確かめるように咳いた。

「……僕の 蕾 は……咲くかな？」

視線は上げず、俯いたまま呟く……。メルンの言う？魔法花？を信じるでも否定するでもなく、勇輝はその存在に希望を懐いていた。

もしその 花 が咲くことが出来たなら

少しは自分を変えることが

勇気を手にすることができるんじゃないか と……。

返事を待つが一向に返ってこない。

不安に駆られた勇輝は恐る恐る顔を上げた。

するとメルンは穏やかな笑みを浮かべ、

「わたしが必ず咲かせてみせるわ それが魔法花栽培師の役目だから！」

短く息を吐いて安堵する。

「……ああ……頼んだよ……」

その瞬間、メルンは勇輝の 蕾 に絡まった蔦が一本 解けた

気配を感じたのだった……。

「1」

メルンがこの世界に来てから三度目の朝が訪れた。

勇輝はまだ布団の中で丸まっている。

ほどなくして目覚ましが鳴り響いた。典型的なベル式の時計だ。

「……ん……うん……」

けたたましい音を響かせる時計を手探りで探し当て、停止スイッチを押す。

朧な意識で見た時刻は六時五十分。勇輝はいつもここからあと十五分を二度寝の時間にあてる。

訪れた静寂に再び意識を沈めた。

ほどなくして階下から騒がしい音が聞こえ始めた。

勇輝は一人つ子の上、母子家庭なので普通なら原因は母親の恭子ということになる。だが明らかに二種類の声が出ている。

考え得る可能性を脳裏に浮かべ、ひとつの答えが出たのとほぼ同時に部屋のドアが勢いよく開け放たれた。

「おはよう、勇輝！ ねえ勇輝、見て 似合ってるかな？」

なにやら嬉しそうな口調に安眠を妨げられた勇輝は不機嫌な表情で布団から身を起こした。

大きなあくびをしながら記憶を引き出していく。

「そつだ……おまえがいたんだよな…… ったく朝から一体どうし

ッ！？」

起こされたワケを訊き出そうと騒音の発生源である少女　メルンに目を向けたその時……瞬時に眠気が吹き飛び、勇輝は言葉を失った。

「……な、なんだ……その格好は……！？」

「えへへ。恭子が着せてくれたのー。どうかな？ 似合ってる？」

感想を催促してくるメルンに視線を釘付けにされたまま、勇輝は辛うじて言葉を絞り出した。

「どう……って言われても……。第一それは僕の学校の制服じゃないか……なんでそんなものを着ているのか……それを先に知りたいよ」

つまりそういうことだ。

メルンは昨日まで来ていた風変わりな衣装から一変して、今は勇輝の学校の制服を着ている。うまく呑み込めない状況にただうろたえるばかりだ。

起き抜けの頭ではうまく整理できない。

勇輝が答えかねていると階下から恭子の声が聞こえてきた。

「ゆうちゃん、メルンちゃん　朝ごはんできたわよー早く降りて来てねー」

年を感じさせない若々しい声だ。

「はい」

勇輝の分まで代わってメルンが元気よく返事をする。

「勇輝、ごはんだって　行こっ！」

感想は諦めたのか、メルンは勇輝の腕を引っ張ると、持ち前の明るさを振りまいて部屋の外へ出た。

そんな状況にふと思考が巡る。

なんだか妹が出来たような感覚に、勇輝は照れくさそうに微笑み腕を引かれるままに階段を下りたのだった。

まだ顔も洗っていないことに気付いた勇輝は台所の手前でメルンと分かれ、独り洗面所へと向かった。

いつもにも増して慌しい雰囲気、どこか楽しげな表情を浮かべながら、勇輝は歯ブラシを手に取り、手早く支度を進めた。

ものの数分で洗面所を後にした勇輝はその足で台所へと向かった。

「勇輝遅いの　ごはん冷めちゃうよー」

「！……待っててくれたんだ。先に食べてくれてもよかったのに……悪いな」

一言謝って席に着いた。

メルンは屈託のない笑顔で、

「ごはんはみんなで食べた方が楽しいの！」
と自信をもって答えた。

「……。そうだな」

わずかに逡巡して、頷く。

頃合を見計らって恭子が場をまとめた。

「さ！ みんな揃ったことだし、いただきますしよう」
いただきます、という声が重なりいつもより少し早い朝食となっ
た。

ゆったりとした時間が流れる中、勇輝はいつもと違う光景に意識
を漂わせていた。普段なら二人だけの空間に今はメルンがいる。こ
れが初めてだというのにまるで昔からこうしていたと思えるくらい
自然に溶け込んでいる。

勇輝は自分の中で何かが動き出しているのを無意識の内に感じて
いた。

一番早く食事を終えた勇輝は着替えるために自分の部屋へと向か
った。

寝巻きを脱いで制服に着替える。

時間割を確認して教科書をカバンに詰めた。

そのまま部屋を出ようとして思い止まり、引き出しを開けて一枚
の写真を取り出した。

写真には二人の少年と二人の少女が写しだされていた。

その中の一人に視線を落とす。

優しさ溢れる瞳と穏やかな笑顔、仄かに赤みを帯びた頬が印象的
な少女だ。小柄な体躯をしており、肩口で整えられた髪には白い花
を模したような純白のヘアピンが施されている。写真の中の少女は、
さきほどメルンが着ていたモノと同じ、勇輝が通っている学校の制

服を着用している。

「……………乃々美……………ちゃん」

名前を口にするが、その声は極めて小さく囁き程度でしかない。誰もいない部屋であるにも関わらず恥ずかしさが込み上げてきたのか、勇輝の頬は明らかに紅潮している。

数秒眺めて元の位置に戻し、引き出しを閉めて部屋を後にした。

玄関に置いてある時計を一瞥して勇輝は目を疑った。

「え……………もう八時前!? ヤバい……………急がなきゃ」

慌てて靴を履く勇輝の後ろには恭子とメルンの姿があった。二人共なにやら楽しそうな表情を浮かべている。

おもむろに恭子が口を開いた。

「ゆーちゃん。学校まで案内してあげてね!」

「……………は?」

少し考えてみたが言葉の意味がよく理解できなかった。

思わず疑問の声が上がる。

すると恭子は悪戯っぽい笑顔を貼り付かせたまま、

「あら? 言ってなかったかしら? メルンちゃんは今日から

学校に通うことになったのよ」

と、さも当然のように言っただけだ。

「……………ツ!? えええええ……………」

「……………ツ!?」

言葉を理解した瞬間、勇輝は素っ頓狂な声を上げた。

「ゆーちゃん、なにもそんなに驚かなくてもいいじゃない……………ね」

勇輝は思考する。

おそらく恭子はかわいいものの好きが高じてメルンの登校を思い立ったのだ。昔自分が着ていた制服まで引っ張り出して きつとメルンの姿に過去の自分を重ね合わせているに違いない。

どういう経緯で転入を了承させたのか甚だ疑問ではあるが、恭子なら不可能ではないと思ってしまう辺り感覚が麻痺していることを改めて思い知った。

深い溜息を吐く。

靴の紐を結び終えて振り返る。

目の前にはメルンが期待の眼差しを向けている。「来るな」と言ったところで勝手に着いて来ることは容易に想像できる。最初から勇輝に拒否権はない。

今までと違うのは？メルンが教室に入ってくる？ということだが

一縷の望みを託して口を開いた。

「……ちなみに……学年とクラスは？」

すると恭子は達成感に満ちた瞳をしたまま口を開いた。

「もちろん」

充分な間を置いて、

「ゆうちゃんと同じクラスよ」

と、決定的な一言を言い放った。

「……え？……でも、どうみても僕より」

「なに？ ゆーちゃん」

勇輝はその言葉の裏にある異論を挟ませぬ圧力を感じ取り 決着がついた。

「……いや、なんでもない」

短く返す。勇輝の顔にはやるせなさが滲んでいた。

「じゃあよろしくね、ゆうちゃん」

勝利を手にした恭子は隣に立つメルンを見て、にぱっ、と微笑んで送り出した。

「さ、メルンちゃん！ 行ってらっしゃい」

「うん！」

無邪気に頷いてメルンは自分の靴を履き始めた。それはこの世界の 少なくとも日本のモノではないことが判る。言い知れぬ

不思議さを秘めた靴に、否応なくメルンが異世界からきたんだという感じさせる。

肩からは異様に膨らんだバッグを提げている。一体なにが入っているのかと勇輝は怪訝な視線を向けた。

靴を履き終わるや否やメルンは勇輝の手を取って玄関の扉を開け、最後に一度振り返って挨拶した。

「恭子！ 行ってくるね」

「ええ 行ってらっしゃい」

恭子は静かに手を振って見送った。

「お、おい……自分で歩けるから手を離せよ……」

勇輝の抵抗も空しくメルンは繋いだ手を離そうとしなかった。

そのまま歩きながら勇輝はある違和感を感じていた。

答えを求めて思考を巡らす。そして

それはまるで本当の兄妹のような在り方

今まで独りだった勇輝の心に柔らかな想いが生まれた瞬間だった……。

「2」

通学路の途中までこそ二人で歩いてきた勇輝だが、さすがに公然と振舞うことは出来ないことに思い至る。メルンの歩調が遅いこともあり、学校に辿り着く頃には遅刻ギリギリの時間になっていた。

転入という名目上、メルンには先に職員室へ行くように告げると勇輝は一足先に教室へ向かった。学校では初対面を装うようにと忠告して……。

「！」

教室に入った途端、数人の男子生徒から刺すような視線が注がれ

た。

疎みながらも席について鞆を机に引つ掛ける。

直後に本鈴が鳴り響き、担任の先生が教室に入ってきた。その隣にはもちろんメルンの姿がある。やや緊張した面持ちでせわしく視線を彷徨わせている。

不意に視線が合ったが注意を守り平静を装った。

メルンを目にした生徒は例外なく「お人形さんみたい」だの「かわいい」だのと騒ぎ立てている。確かにメルンは日本人離れた容姿をしており、勇輝は改めて少女がかわいい事を認識した。

先生に促されて黒板に名前を書いた。それもメルンが身につけている言花のお陰なのだと勇輝は独りそんなことを考えていた。

ほどなくして黒板に『メルン』と書き終わると振り返って、「メルンです。よろしくおねがいます」

と述べて深々と一礼をすると、不釣り合いなほど大きなバッグが揺れてよろめいた。その動作ひとつだけでも教室は不思議な盛り上がりを見せた。

席は丁度教室の真ん中 対する勇輝はそこから左手斜め下

つまり窓側の一番後ろだ。

座る直前、メルンは一度勇輝の方へ視線を向けたが、逆に逸らされて大人しく椅子に座った。

「メルンちゃん……って呼んでいいかな？ よろしくね！」

隣の席の女の子が声を掛けてきた。仄かに赤みを帯びた頬が印象的で肩口で整えられた髪には白い花を模したヘアピンが見て取れた。

「うん！ よろしく ……んーと……」

メルンが呼び名に困っていると、少女は、

「あ、ごめん……名前言ってなかったね。 陽咲ひさき乃々美だよ！」

「 陽咲さん、よろしくなの！」

快活に挨拶したメルンを、少女は瞬時に制した。

「違うよ、メルンちゃん」

「え？ ……わたし間違えたの？」

確実に少女の名前を呼んだと確信しているメルンはただ困惑するばかり。

そんな姿を見て悪戯っぽく微笑んで見せた。

「 乃々美だよ。メルンちゃん」

その瞬間、メルンは乃々美の意図を理解し、改めて言葉を紡いだ。

「 乃々美ちゃん、よろしくなの！」

「 うん！」

とても満足気な表情でにこやかに答えた。

二人の会話が終わると同時に先生の連絡も終わったようだ。

朝のホームルームが終わるといよいよ授業が始まる。次の先生が来るまでの僅かな時間、メルンはクラス中の生徒に揉みくちやにされることとなった。

勇輝はそんな光景を教室の後ろからただ見つめていたのだった……。

授業中、メルンは勇輝の様子をしきりに窺っていた。 蓄 に絡み付いている蕙の原因を確立させるためだ。

先日的一件でほぼ判明しているものの、他に原因がないとも言いきれないからだ。

メルンの考えとは裏腹に、六限目の授業が終わるまで、勇輝の身には変わったところは見受けられなかった。唯一あったと言えば、しきりにメルンの方へ視線を向けていたぐらいだろうか。だがメルンはそのことを大して気には留めなかった……。

「 起立……礼 さようなら」

『 さようなら』

日直の号令と共に、クラス全員で今日一日の授業終了を告げる。

その後はそれぞれが属する部活へと散っていく。

そんな中勇輝は足早に教室を後にした。

メルンは転校初日ということで様々な部活から勧誘を受けている。

時間にして十五分ほどで解放されると、勇輝を探すため教室を飛び出した。

昇降口で靴を履き替えて校庭へ出る。勇輝を捜すといってもメルンが知ってる場所は限られていた。

確信にも似た予感を懐きながら小走りに急ぐ。

「あ　勇輝！　やっぱりここにいたんだ」

予想通りの場所に勇輝の姿を見つけてメルンは明るく呼びかけた。もちろんそこは、二人が初めて出会った花壇の前だ。名前を呼ばれた勇輝はメルンを一瞥した後に静かに口を開いた。

「……僕の居場所はここだけだからね……」

まるで枯れた花のような寂しさを漂わせている。

「……勇輝……」

掛ける言葉がすぐに浮かばず、ただ名前を呟いた。

しばらく空を仰いでいた勇輝は、思い出したように視線をメルンへと向けた。

「　そうだ……おまえまだ部活に入ってないだろ？　僕と一緒に

園芸部に入らないか？」

「え？」

突然の誘いにメルンは驚きの声を上げた。それは勇輝自身も同じだった。自分でも驚く言葉に戸惑いの色がにじんでいる。

再び視線を花壇へと戻して言葉を継ぐ。

「……おまえ言っただろ？　僕らは？似てる？……って。違いはあるだろうけど？花？を育てていることは一緒だろ？……だから、どうかって思ったんだ」

勇輝は一言ずつ確かめるように呟いた。

花を優しく撫でながら、黙したまま返事を待つ。

三日前に初めて出会った時の、冷たい口調とは違い、おもいやりに満ちた言葉にメルンは喜びを覚えていた。

その余韻に浸っていたメルンは静かに呼吸を整えて口を開いた。

「うん！ そうするの！」

花開いたような笑顔で答えると、勇輝の傍にしゃがみこんだ。

「……この花……咲くといいね……」

花壇の横に置かれている何も咲いていないプランターを眺めて切なそうに呟いた。勇輝が「咲かないんだ」と寂しそうな表情で零した光景が蘇える。

不意にメルンはある事が気になり、勇輝に問うた。

「ねえ……勇輝。……ここには何を植えたの？」

それは少しでも勇輝の手助けが出来ればと思いついた言葉だった。この世界の花には詳しくないメルンだが、花の名前がわかれば調べることが出来るかもしれない。そう考えたのだ。だが返ってきた答えは意外なものだった。

「……ここに何の種が植えられているのか……僕は知らない……」

「え？ ……知らないの？」

予想外の言葉にメルンは驚きを隠せないでいた。「どうして？」と問うメルンに勇輝は記憶を辿るようにゆっくりと語り始めた。

「……これは僕がまだ保育園にいた頃に、ある女の子から貰ったんだ。『すごくキレイな花が咲くんだよ』って言いながら……渡してくれたときの笑顔を……僕は今でも鮮明に覚えているよ……」

「そう……だったの……」

プランターに秘められた勇輝の想いを受け止めてメルンは目を瞑る。そうすると、幼き頃の勇輝の姿が瞼の裏に映し出されるような気がしたのだ。

「そのころからずっと……世話をしているの？」

「……ああ」

短く返して一息置き、言葉を継いだ。

「おかしいだろ？ 昔の思い出を……今でも引きずってるなんて……」

そう呟く勇輝の心に、メルンは確かな鼓動を感じた。

とても温かくて強い想いを孕んだ鼓動……。

だがその声は空しくも空に溶けた。

直後、男の子の右足が勇輝の腹部を鋭く蹴り上げた。

「つか……は……！」

あまりにも的確な蹴りに二秒ほど呼吸が止まる。必死に息を吸おうとするが思うようにいかず、かえって状況を悪化させた。

身を挺してプランターを守る勇輝の姿に、男の子は不快感に顔を歪ませた。

今はまだ部活動の真っ最中だ。

校舎の片隅で行われていることになど、気付くものはいない。勇輝にとっては喜ばしくない状況といえる。

それをいいことに男の子の攻撃はさらに続けられた。

そのすべてを勇輝は受けきった。

「そんな何も咲いてねえ箱の　どこがそんなに大事なんだか。

チツ……胸糞悪いぜ……今日はこのくらいにしといてやらア」

そう吐き捨てて去っていった。姿が見えなくなると同時に、メルンは勇輝に駆け寄った。

「勇輝！　大丈夫！？」

体を抱えあげ、勇輝の頭を自分の膝に乗せながら呼びかけた。

「ははっ………バカだろ？　こんな咲かないモノを必死に守るなんてさ……」

呟いた言葉には自虐が含まれている。

メルンはそれを即座に、やわらかく否定した。

「そんなことないよ。そこが勇輝のいいところだとわたしは思うの。幼子をあやすように優しく囁いた。

「……ありがとう……」

空を遮る形で視界を覆っているメルンの顔を見つめて言葉を零した。

勇輝が育てた花々が穏やかな風に揺れる。

それはまるで勇輝を励ましているようにも思えた。

ほどなくして訪れた微睡みに、二人は身を委ねたのだった……。

「……………。起きたか？」

眠りから覚めたメルンの頭上から、勇輝の声が降りてきた。

いつの間にか自分が大樹に寄りかかっていたことに気付いたメルンは視線を巡らす。辺りは既に茜色に染まっており、下校する生徒の姿もポツポツ見受けられた。

ふと花壇に目を向けると、手入れしたばかりだという様子が見取れた。自分が眠っている間に世話をしたのだらうと心の中で呟いた。

「あれからすぐに起きて世話をしていたの？」

「ああ…………それが僕の役目だから……………」

責任感を帯びた言葉を零して薄く笑った。

「ごめんね…………わたしも？えんげいぶ？なのに……………」

自らの非を詫びて力なくうなだれる。

すると目の前にスツと、手が差し伸べられた。

顔を上げて言葉を待つ。

「気にする事ないよ。今日入ったばかりなんだから少しずつ慣れていけばいい」

「うん」

一段高い声で元気よく返し、勇輝に手を引かれて立ち上がった。手を離して一足先に正門に向って歩き出す。

少し歩いて立ち止まり、ゆっくりと振り向いて口を開いた。

「帰るぞ　メルン」

それはほんの些細な変化なのかも知れない。だがメルンには大きな一歩に思えた。

少しずつ積み重なる二人の時間が

着実に勇輝の心を解放へと導こうとしている。

「3」

何度か通ることでも慣れ始めた帰り道を、二人は手を繋ぎながら並んで歩く。その光景は正に兄妹そのものだ。

メルンは勇輝の横顔へ視線を向けて話を切り出した。

「ねえ……勇輝。さっきの男の子とは昔からあんな感じなの？」

二度も勇輝が打ちのめされる光景を目の当たりにしたことでも不安を覚えたのだ。

心に根ざした質問に思わず表情を強張らせ、メルンを凝視した。少し過剰な反応にメルンは冷や汗を浮かべて見つめ返した。

メルンから視線を外し、宙に視線を結んでしばらく思考を巡らす。しばらく歩いてから勇輝は寂しそうに話し始めた。

「あいつとは保育園からの馴染みなんだ。少し前までは？友達？つて呼べてたんだけどね……いつからか、今のようない関係になっただんだ。……どこで離れたのかな……はは」

「……。勇輝……」

途端、メルンは懐いていた違和感が払拭されたような気がした。

（だから勇輝はあんな状況に置かれても……心が折れないんだね……）

その言葉を口にするのではなく、そつと胸に留めることにした。

「勇輝は強いね」

「……な……なんだよ急に……。そんなこと……ない」
頬に赤みが帯びる。

顔を隠そうとそつぽ向いた弾みで繋いだ手が離れた。それでも勇輝は構わずに歩き続ける。

「あ！ 待つてよ、勇輝」

メルンは足早に立ち去ろうとする勇輝のあとを軽い足取りで追いかけていった。

二人が家に着いた直後、恭子は精神保養だと言わんばかりにメルンを抱きしめる。既に慣れつつある奇妙な光景に、勇輝は複雑な視線を向けながら自分の部屋へと向った。

勇輝が階上へ上がったことを確認して、恭子は話を切り出した。

「ねえ、メルンちゃん　勇輝は……学校で元気にやってるかしら？」

「っ！」

恭子の言葉にメルンは声を詰まらせた。その僅かな強張りを見逃さず言葉を継いだ。

「……そう。やっぱり……まだ……」

悲しそうな表情でそう呟いた恭子は抱いた腕に少し力を籠めた。

メルンは恭子の腕を優しく握り返した。

「　そんなことないよ……」

数拍の間を置いてメルンの言葉は続く。

「……今はそうかも知れない……だけど勇輝は強い心を持つてる

わたしはそれを手助けしたいの！」

不意に不思議な安堵感に包まれた恭子は思考の中でメルンの言葉を繰り返してから「ありがとう」と囁いた。

程なくして部屋着に着替えた勇輝が降りてきた。

なんとも言い難い雰囲気を感じ取った勇輝は疑問の眼差しを向けた。

だが二人は何事もなかったかのように装い、恭子は台所へと消えていった。

その拳動は、勇輝の目には明らかに不自然に映った。

「……。……なんの話をしてたんだ？」

気にしないようにしようとしたが、どうしても気になったので質問を口にした。

するとメルンは笑顔を浮かべて、「なんでもないの」と誤魔化し

た。

勇輝はそれ以上追及することなく「そうか」と呟き台所の方を指差した。

「ごはん出来たみたいだよ」

「うん！ 行こっ！」

快活な返事でメルンは勇輝の手を取ると食卓へと足を運んだ。

「1」

メルンがこの世界に降り立ってから四日目の朝が訪れた。

早朝。メルンは妙な胸騒ぎを感じて目を覚ます。時計は五時四十分を指している。勇輝と恭子はまだ起きていない。

時間を持って余したメルンは早々に身支度を整えることにした。

洗面所で顔を洗い歯を磨くと、再び部屋に戻り恭子から譲り受けた制服に着替える。

ジエントからもらった服とはまた違う、独特な心地よさに思わず笑みが零れた。

ふと違和感を覚え、窓に近付き空を見上げると、毎日楽しみにしている太陽の光が分厚い雨雲に遮られていた。

「空が……泣いているの？」

誰にともなく問いかけたメルンは、心の中で元の世界に想いを馳せる。

同時に浮かんできたのは大切なジエントだった。

彼は今、患っていた病状が悪化し、一刻も早い 魔法薬 の投与が必要な状況に陥り床に臥している。

メルンは 魔法薬 の調合に必要な魔法の花 夢想花 を探

し求めてこの世界に来たのだ。

だがメルンは今の状況に対して心の底では焦りを覚えていた。

起動に 夢想花 を必要とする 時の花 が機能停止状態にある以上、他の惑星へ行くこともできない。ましてやこの世界の他に

夢想花 が存在する確証もない。

なんとしてでもこの世界で 夢想花 を見つけないといけないのだ。

「おじいちゃん……もう少しだけがんばって……必ず 夢想花 を

持って帰るから……！」

遙か遠い地にいるジェントを想い、両手を組み祈りを籠めた。

突然部屋のドアが開かれ、恭子が顔を出した。

「メルンちゃん？ 早いね。もう起きてんだ」

「うん……なんだか目が覚めちゃったの」

振り向きながらそう答えると、恭子がそつと近付きメルンの肩を抱いた。

「何か 心配事でもあるのかな？」

心を見透かしたかのような鋭い指摘に動揺をする様子を見た恭子は「うふふ。どうやら当たりみたいね」と囁いた。

その言葉にしばらく思考を巡らしたメルンはやがてひとつの疑問を口にした。

「ねえ……勇輝と同じクラスの 背が高い男の子知らない？」

メルンの背中で早くも和みモードに入っていた恭子は、力の抜けた相槌を打ってから思い出すように言葉を紡いだ。

「智とち也ちやくんね。もちろん知ってるわよ。……彼は勇輝の 保育園

のころからの幼馴染なのよ」

「……おさな……なじみ……？」

思わず言葉を繰り返した。意味が分からないわけではない。言い知れぬ違和感が脳裏を走ったのだった。

メルンは恭子の腕を取って振り返ると、不安そうな眼差しを向けた。

「で……でも……」

思うように言葉にできない。その気持ちを察したのか、恭子はメルンの言葉を代わりに呟いた。

「その様子だと……やはりまだ仲直りできてないようね……」

淡く儂い希望がついたような……そんな悲しみを浮かべている。溢れた涙を、白く細長い指で拭う。一粒の涙が空中に煌き、床に

弾けた。

「昔は……とても仲良しだったのよ。いつも四人で遊んでいたわ」
微笑ましかった日の記憶を辿りながら静かに語る。
するとメルンが声を上げた。

「四人？」

「ええ、そうよ」

短く肯定すると、恭子はおもむろに踵を返し部屋から出て行った。
ほどなくして戻ってきた恭子の手には一枚の紙が携えられていた。

「これが昔撮った写真よ。中央に写っているのが乃々美ちゃん
多分同じクラスにいるはずよ。その隣が伊織ちゃんっていつてね

……ううん、これは私が言うことじゃないわね。ごめんね、今の
はなしね」

刹那、メルンに衝撃が走った。

「ある日を境に四人は　　いいえ……三人は一緒に遊ばなくなった
のよ……」

重い溜息をつく。

「あのっ　その写真……借りてもいい？」

意外な言葉だったのか、恭子は僅かに逡巡したが、すぐに答え返
した。

「ええ、いいわよ。　　はい、どうぞ」

「ありがとうなの！」

受け取った写真をもう一度見つめる。

その時メルンは

目の前にある一枚の写真が

勇輝の心の奥底に

深く根差しているように思えて……仕方なかった。

恭子から写真を預かったメルンは、まるでお守りのように制服のポケットへ収めた。

「さ、そろそろ朝ごはんの支度をしなきゃ！　メルンちゃんも手伝ってくれるかな？」

「うん！　手伝いたい！　わたしが勇輝のごはんを作るの！」

「あらあら、まるで新婚さんみたいね。頼もしいわ。　それじゃお願いね！」

恭子の言葉に弾かれ、メルンは足早に台所へと駆けて行った。

恭子に教えてもらいながらも、メルンは勇輝のために朝食作りに奮闘している。

両親がいたときは母親が　今はジェントが料理を作ってくれているため、実はまったくの素人なのだ。

それでも好奇心旺盛な性格に助けられ、一つずつ丁寧にこなしていく。センスは悪くない。包丁の扱いひとつで恭子をハラハラさせたものの、さすがに両手が絆創膏だらけになるということとはなかった。

朝食作りを開始してから約一時間が経過し、張り詰めていた緊張の糸がようやく解けた。

「　完成なの！」

両手を目一杯伸ばし、達成感を噛み締めた。

「よくがんばったわね、メルンちゃん。勇輝も喜ぶわ」

「ほんと!？」

満面の笑みで問い返す。

すると恭子は穏やかに微笑んで、

「ええ。きつとね」

と答えた。

満ち足りた雰囲気台所に漂う。

不意に恭子は時計を一瞥するとおもむろに口を開いた。

「そろそろ時間ね。メルンちゃん勇輝を起こしてきてくれるかな？」

「うん！ わかったの」

元気よく答えるとエプロンを着けたまま台所を飛び出し階段を上がった。

数回ノックして一声かける。

「勇輝、朝だよ。 入るね」

ドアを開いて中へ入る。

爽やかな風が吹き込む室内には、当然ながら勇輝の姿があつた。

メルンは静かに近づくと傍の椅子に腰掛け、勇輝の顔を覗き込んだ。怖い夢を見ているのか表情は穏やかではない。

「……勇輝……」

メルンは不安そうな声を溢した。

やがて苦しそうに呻きだしたので、メルンは慌てて勇輝を抱き起こした。

「勇輝……大丈夫？ ……怖い夢でも見たの？」

荒く息をつきながらメルンへ視線を向ける。

「……メルン……？ ああ……朝か。……なんだその格好は？」

まだ頭が起ききれていないのか思い付いた端から言葉を並べる。

メルンは動揺を静めきれない勇輝を黙って抱きしめた。

「ッ！？」

前触れのない行動に勇輝は声を失う。

だが次第にメルンの温もりが伝わり、やがて心が落ち着いてきた。

「……ごめん……ありがとう。もう大丈夫……」

一拍の間を置いてメルンは勇輝から離れベッドの傍に立った。そのまま後ろ手を組むと体を少し屈め、和やかな笑顔を浮かべた。

「朝ごはんだよ、勇輝！ 早く降りてきてね！」

「あ、うん。……すぐ行くよ」

勇輝の返事を確認してから、メルンは階下へと下りていった。

再び静寂が訪れる。

二度寝という誘惑を必死に振り払いベッドから這い出ると大きく背伸びをした。なぜか体が言い知れぬ倦怠感に包まれていた。

「……またあの夢だった……思い出の　森の中……」

誰にともなく呟き、危なっかしげに階段を下りながら未だぼんやりしている頭を叩き起こす。

台所を通り過ぎて洗面所へ向かった。

冷たい水で顔を洗った途端、意識がスッキリとした。続けて歯を磨き、ようやく食卓に顔を出した。

「おはよう　って、うわっ！？　なにこれ……すごい手が込んでるんだけど？」

「ゆーちゃん、いつまで寝てるのよ……もう七時半回ってるのよ？」

勇輝の疑問はそっちのけで恭子は少しばかりの怒りをぶつけた。

だがすぐに含み笑いをすると意気揚々に事情を説明した。

「　というわけで、これはメルンちゃんがゆーちゃんの為につて作ったのよ」

「メルンが……僕のために……」

途端に気恥ずかしくなったのが、紅潮した頬を隠すように俯きながら席についた。勇輝の反応にふたりは顔を見合わせて微笑んだ。

「早くしないとふたりとも学校に遅れるわよ」

「　さあ、勇輝！　食べてみて。自信作なの！」

向かい側に座ったメルンが催促する。早々と降伏した勇輝は箸を手に取りメルンが作ったらしい料理を口に運んだ。次の瞬間

「……お　おいしい！」

素直な感想が零れ、メルンは満足そうな表情で頷いた。

—安心したのかメルンも朝食を摂り始めた。

箸は使い慣れていないらしく、手にしたスプーンがなんともいえぬ愛嬌を醸し出している。

勇輝はメルンへ視線を向けてそっと言葉を紡いだ。

「　ありがとう」

すると一旦食べるのをやめて顔を上げ、

「うん！」

と柔らかな眼差しを浮かべ、小さな手でピースサインを作ってみせた。

その後勇輝はメルンが作った優しい味のする朝ごはんを残さず食べ終えた。

「ゆーちゃん、大変！ もうこんな時間 早く着替えて！」

「うわっ！？ ホントだ。 着替えてくるッ！」

言いが早く、勇輝は慌しく階段を駆け上がると、驚くべき早さで着替えて戻ってきた。

「おまたせ」

「行こっ！ 勇輝！」

まだ靴も履き終えていないにも関わらずメルンに急かされ、踵を踏んだまま玄関を出た。

手を引かれながらもなんとか片足ずつ靴を履き、歩道を歩き始めたその時、

「ゆーちゃん、傘は持った？」

今にも降り出しそうな曇天に心配した恭子が軒先まで出てきて声を上げた。

勇輝は空を仰いで僅かに逡巡し、恭子の方へ向き直って答えた。

「大丈夫。 行って来ます」

大きく手を振って再び歩き出す。隣ではメルンも元氣よく手を振っている。

恭子はその光景を見つめ複雑な笑みを零したのだった。

「2」

教室に入った途端、異様な空気が場を支配しているのを感じた。周囲を一瞥した勇輝はその原因を即座に看破した。

(……………あいつ……………)

視線の先に捉えたのは、昨日勇輝が大切にしているプランターを蹴り飛ばそうとした長躯の男子　智也だ。

不意に視線が合いそうになったため俯いてやりすごす。そのまま席につき授業が始まるのを待った。

一方でメルンは隣の席の少女　乃々美と話しをしていた。

「おはよう、メルンちゃん！」

「乃々美ちゃん、おはようなの！」

明るく返して席に座り、異様に膨らんだバッグを机の横に引っかけた。

初日こそクラスのみんなに囲まれたメルンだが、二日目は打って変わって静かなものだった。それはメルンが放つ独特な雰囲気のためか、教室を支配している不穏な空気のせいなのか　真意は定かではないが誰もが様子見をしているのは明らかだった。

そんな中で自然に会話が出来ている乃々美はある意味ラッキーなポジションなのかも知れない。

「ところで、メルンちゃん。部活は決まった？」

「うん、決まったよ」

とても嬉しそうな声に乃々美は思わず聞き返した。

「どこに？」

「？えんげいぶ？なの！」

「！……………園芸部……………」

乃々美は自身に言い聞かせるように呟くと「……………そう」と返した。間もなくして先生が教室に入ってきた。

教壇に立ったのを見計らい、日直の号令がかかる。

「起立　礼……………おはようございます。　着席」

教室が静まり順番に出席を採り始めた。

メルンは窓から覗く空を見つめて今朝方感じた胸騒ぎを思い返す。その不安は昼休みに異変となって表れ始めた。

学校では他人同士ということになっている勇輝とメルンはそれぞれ

れ別々に昼食を摂っていた。

メルンが乃々美と談笑しながらごはんを食べていると、視界の端に勇輝の姿が映った。悟られないようにさりげなく視線を向ける。しばらくすると智也が勇輝の机に近付いてきた。なにやら一方的に言葉を浴びせかけているように見える。

席が離れているため内容は聞き取れないが、智也が口を開く度に勇輝の表情は暗くなってゆく。

(あれは確か……。そう……。智也くん……。)

その光景にメルンは胸が締め付けられる思いがした。

そして智也は勇輝の耳元で何かを囁いた。次の瞬間！

「いい加減なことを言うなッ！」

机を叩いて必死の形相で睨め付けた。

異様な雰囲気にも誰かが勇輝たちのやりとりに注目する。緊迫した空気が教室を支配する。

割って入ることが出来ず誰もが固唾を呑んで見守る中、智也が振り返っておもむろに言葉を放った。

「勇輝が好きなのは陽咲なんだってよオ！」

途端、水を打ったようにしんと静まり返った。

反射的にメルンは視線を振ると、乃々美は状況が把握できないといった表情で固まっていた。ただ呆然と勇輝の方を向いている。

密かに想い懐いていた部分を暴露された勇輝は激しく動揺した。

自分にとって乃々美は釣り合わないとい心はどこかで思っているのだろう……。周りの反応に怯えているようにメルンの目には映った。

恐る恐る顔を上げた視線の先に乃々美がいた。

無表情で黙したまま視線を向けているその姿が、勇輝にはまるで自分が拒絶されているように映ったに違いない。そうメルンは思った。

居た堪れなくなった勇輝はクラスメイトたちの視線から逃げるよ

うに教室を飛び出した。

智也は目的を果たしたと言わんばかりの笑みを浮かべて教室を出て行った。

当事者が乃々美だけとなった教室にはざわめきが起こりつつあった。

思いつめた表情をしている乃々美に気付いたメルンは、意を決して言葉を切り出した。

「乃々美ちゃん……勇輝のこと……何か知っているの？ ……もし知っているのなら教えて欲しいの……それが勇輝を救う唯一の手段かもしれないから」

メルンの言葉に平静を取り戻した乃々美は、その決意に満ちた瞳を見つめて口を開いた。

「……メルンちゃん……あなたは……一体……」

紡がれたのは疑問。

メルンは優しく微笑んで乃々美の手を取った。

「わたしも乃々美ちゃんにすべてを話すよ……だから 乃々

美ちゃんも話して欲しいの！」

「メルンちゃん……」

繰り返し名前を呟く。

メルンの強い想いに乃々美は握られた手に力を籠めて静かに頷いた。

「……うん、わかったわ。話すね」

とは言ったものの、さすがにみんなが注目している教室では話し辛いのか、場所を変えるために教室を出た。

「あ、ちよつと待って」

そう言うとメルンはトテトテと自分の机に戻ると、異様に膨らんだバッグを手に戻ってきた。

「さ、行こっ！」

クラス中の注目を集めたまま、メルンと乃々美は教室を後にした。ふたりは校内を少し歩き、普段あまり使われることのない階段へ移動した。

「……ここなら大丈夫そうね」

乃々美が小声で零す。

呼吸を整え乃々美は話し始めた。

「……勇輝くんとは保育園から一緒なの。あの頃は四人でよく遊んだわ」

ふたりが座っているのは立入禁止の屋上へと続く階段。視線を上げると暗闇が視界を染める。乃々美はそんな空間に昔の光景を見ているのか穏やかな表情をしている。

「それが智也くん？」

その声に乃々美は少し驚いた様子でメルンの目を見た。

「そうよ。昔はあんなんじゃないやなかった……勇輝くんととても仲良しで　笑い合ってた。……いつからか二人は険悪な関係になっただわ」

メルンはここ数日で勇輝と智也との光景を思い出していた。恭子から聞いた？おさななじみ？という言葉に、言い知れぬ違和感を覚えたことを。

「……三人でよく近くの森を探検したり、木々や花々を眺めて遊んでいたの。花を見ている時の勇輝くんはとても優しい目をしていたわ　きつと今でも同じなんだと思う……」

乃々美の言葉にメルンは心の中で頷く。

「そんな優しさが……私にはとても心地よく感じたの　いつしか勇輝くんに惹かれていた自分に気が付いたわ……」

メルンは相槌を打ちながら静かに乃々美の話に耳を傾けている。

幼き日々を思い出し、そつと手を伸ばした。そして　まるで記憶をなぞるようにゆっくりと戻し、胸に手を当てた。

「……楽しい時間はあっという間に過ぎたわ……。そのうち三人とも小学校に入って、数年すれば中学生になる……。　そう思った

途端に寂しい気持ちが入み上げてきて　その時の気持ちを忘れずに繋ぎとめておく何かがある……私は勇輝くんか？あるモノ？を渡したの　」

思い出を語る乃々美の声はとても儚げで寂しさに満ちていた。

乃々美の言葉が途切れ二人の間には沈黙が下りる。

無言のまま二分余りが経過した。

「……あるモノ？」

次の瞬間　メルンは衝撃の言葉を耳にした。

「それは……？咲かない花？……よ」

「　　つつ！？」

刹那、いつか勇輝が口にした言葉が脳裏を駆け抜けた。

『……この花は……咲かないんだ……』

視線の先にあるのは小さなプランター……勇輝が大切にしているモノ。

いつかきつと咲くことを願って懸命に世話をしている……だが一向に咲く気配はない現実には勇輝は寂しさを滲ませていた……。

「……それって……あのプランターのこと？」

「　　え？　メルンちゃん何を言って……。十年も前の話よ？」

「……まだ残ってるわけ　」

淡い期待を振り払うかのような乃々美の言葉をメルンは真剣な表情で受け止めた。

「……メルンちゃん？」

「勇輝は今でも……プランターの花が咲くことを信じて世話をしているの！」

「えっ！？　そんな……まさか……」

乃々美は驚愕に目を睜った。

「乃々美ちゃん……勇輝のことが好きなら　どうして気持ちを伝えなかつたの？　ただ、思い出を繋ぎ止めておくためだけにプラントーを渡したの！？」

鬼気迫るメルンの追及に乃々美は唇を小刻みに震わせている。

「……違う。……私は気持ちを伝えようとした　けど出来なかつた。もしかしたら楽しかった日の思い出が崩れてしまっただけじゃないかって……そう考えると急に怖くなって……」

絞り出すように乃々美は過去の自分を打ち明ける。

「その気持ちが勇輝を縛り付けていたのね。勇輝はきつと　花が咲いたら思いを打ち明けるつもりだったと思うの……。ねえ、乃々美ちゃんもそう思う？」

メルンの問い掛けに乃々美は涙声で「うん」と答えた。

「……勇輝は強いよ。ずっと乃々美ちゃんと想ってきたんだから

」

そこでゆっくりと深呼吸して気持ちを整えた。

そして優しく微笑みを浮かべて、

「　だから今度は乃々美ちゃんが……自分の？弱さ？という殻を破って　勇輝の想いに応えなきゃいけないの！」

その瞬間、乃々美は自分の中で何かが砕け散る音が聞こえた気がした。もしかしたらそれはメルンが言った？弱さ？なのかも知れないと乃々美は思った。

勇輝の気持ちを知った乃々美は先刻の状況を思い返した。

クラス中に想いを暴露され、動揺する勇輝に乃々美は無言の眼差しを向けていたのだ。もしかすると勇輝がそれを悪い意味に受け取ったのではないか　そこまで思考を巡らした時、乃々美の瞳からは迷いは消えていた。

「　メルンちゃん！　勇輝くんを捜さなきゃ！　このままだ

と……思い出すら消えちゃう　」

「うん……一緒に捜すの！」

そう言い放ったメルンは突然制服を脱ぎ捨てた。

「……え、ちょ……ちょっと、メルンちゃん!? 何をして」
予想外な行動に動揺する乃々美を横目に、メルンは持ってきたバッグから一着の服を取り出した。

それは乃々美の目にとても幻想的に映った。

この世界にはない独特の優しさに溢れた 可愛らしい服。

メルンは急いで着替えた。

「……メルンちゃん……あなたは」

乃々美の問い掛けに答えるようにメルンは華麗に身を翻し、両腕を肩幅ほどで伸ばした格好で言葉を紡いだ。

「わたしは 魔法花栽培師なの」

「ソルニム……キュルティスト」

瞬間、乃々美はメルンがこの世界の人ではないことを悟った。

(やっぱり……異世界からの旅人さん……だったのね)

「わたしのことはあとで」

あとで話すね、という言葉は乃々美に制された。

「大丈夫。大体だけど想像ついたわ」

「え? どうして?」

「なんとなく かな?」

悪戯っぽく笑ってみせる。

答えになっていない乃々美の言葉だが、それでもメルンは、まるですべてを話し終えたかのような不思議な感覚に包まれていた。

校内に予鈴が鳴り響いた。昼休みが終わったのだ。

だが二人は予鈴など気にも留めず互いに顔を見合わせる。

するとメルンは何を思い出したように脱いだ制服からなにかを取り出しポケットに仕舞い直した。

そして二人は勇輝を捜すべく駆け出した。

「でも……どこを捜せば……」

廊下を走り出して間もなく、乃々美は検討がつかないといった様子で呟いた。

階段を駆け下りながらメルンは思考を巡らす。

途中、何度か先生に見つかりそうな場面に遭いながらも、なんとか潜り抜けた。

やがてメルンが口を開いた。

「勇輝が行きそうな場所　勇輝の花壇なの」

メルンが自信をもって答える。

目的地が定まり二人は廊下を蹴る足に力を籠め、さらに加速した。昇降口で靴に履き替え、すぐ傍にある花壇へと急いだ。

だがそこには勇輝の姿はなかった。

「……いない……ね」

肩で息をつきながら乃々美が呟いた。

「うん……。　ッ!？」

刹那、メルンがその光景の異変に気付いた。

「メルンちゃん……どうしたの？」

乃々美はこの場所を訪れたことがないのか、異変に気付くことはなかった。

メルンはゆっくりと異変の正体を告げた。

「　プランターが……プランターが無くなってるの!」

「　っ!？」

メルンを一瞥してから、自分があげたプランターが本来在ったという空間を凝視した。確かに花壇の横には何かが置いてあった痕跡が見受けられた。

「プランターが……?」

半ば思考を放棄した言葉を吐く。

「いけないっ!　……早く勇輝を見つけないと……」

「……メルンちゃんそれってどういうこと?」

震える声で答えを求める。

メルンは哀しみに顔を伏せて恐る恐る思いを告げた。

「勇輝は思い出を消そうとしているかも知れないの！」

最悪のシナリオが乃々美の脳裏をよぎった。

冷たい水滴を頬に受け、ふと空を仰いだ。

乃々美にはその光景がまるで押し潰されそうなほど暗い悲しみのように見えた。

やがて雨粒は、目に見えて降り始めた。だが

傘を取りに戻る時間が惜しい。そう考えた乃々美は踵を返して駆け出した。

「乃々美ちゃん！？ 勇輝の居場所 わかるの？」

問いかけた勢いのままメルンもあとを追う。

雨は一層強く地面を叩き始めた。

既に乃々美の髪はシャワーを浴びたように濡れそぼり、毛先から雨が滴っている。そんな事など気にも留めず、正門を出た時、乃々美は振り向くことなく言葉を発した。

「確証はないわ。……けど、勇輝くんが思い出を消そうとしているなら 行き着く場所はひとつしかない きつと……そこにいるわ！」

確固たる思いが籠もった乃々美の言葉に、メルンは「あ！」と、一段高い声を上げた。

「気付いたみたいね。そう 昔、勇輝くんたちと遊んだ 思い出の森よ」

「急ごう、乃々美ちゃん！」

二人の足取りにも力強さが戻る。

目指すは幼き頃によく遊んだ 思い出の森。

事態は一刻を争う状況に置かれていた。

激しい雨が降り注ぐ中、賢明に駆ける二人の姿を、遠くから見つめる人影があった。その人物は短い溜息を吐くとその場を後にしたのだった……。

目的の森は、学校と勇輝の家の、ほぼ中間に在った。見るからに小さな子供の好奇心を刺激しそうな空気を漂わせている。

「……ここが……思い出の森……」

眼前に聳え立つ森は壮大な存在感を放ち、メルンと乃々美を見下ろしている。

おそらくそこは、今でも子供たちの恰好の遊び場となっていることだろうとメルンは思ったが、その考えはすぐに否定された。

「そう……ここが私たちの思い出の森……。だけど今は封鎖されているのよ」

弱く零す乃々美の声に、メルンは森の入り口へと視線を向けた。森の周囲は高いフェンスに囲まれ、さらに有刺鉄線が進入を阻んでいる。とても小さな子供が易々と入れるようには見えない。

「封鎖？……どうして？」

問わずとも答えは薄々解っていた。

しばらくして乃々美から返ってきた言葉は予想通りのものだった。「ある日ね……一人の女の子が崖から転落する事故を起こして亡くなったのよ。以降、この森は危険区域に指定され 封鎖されることになったわ」

アスファルトを叩く雨音が切なく響く。それはまるで乃々美の心境を映し出しているかのような……哀しい旋律。

「見て。……入口が 開けられているわ……」

周囲こそフェンスや有刺鉄線で囲われているが、その入口はいたって簡素なモノだった。といっても小さい子供では決して開けることは出来ないようにはなっている。どうやら町の大人たちが頻繁にこの森を出入りしているのだろうとメルンは考えた。

メルンは乃々美の目を見つめて、静かに頷いた。

「行くよ……メルンちゃん」

長年近寄ることのなかった思い出の空間に、乃々美は一步踏み込んだ。とても痛ましい。されど確かな決意を秘めた面持ちで湿った土を踏みしめて先へと進む。

刻一刻と高まる不安に心が焦る。だが雨でぬかるんだ足場の所為で思うように進めずにいた。

「ダメ……このままじゃ間に合わないッ！」

突然乃々美が悲鳴にも似た声を上げた直後、意を決して地を蹴る足に力を籠めて走り出した。

もはや転ぶことさえも厭わない。その姿をみたメルンも同様に走り出した。

「こんな広い森のどこに勇輝はいるの？」

前を走る乃々美に問い掛ける。

頭上を緑葉が覆っているというのに、雨は容赦なく二人の体を打ち濡らす。メルンが紡いだ声もかき消されそうなほどに。

「大丈夫……あの頃通った道は、今でも覚えてるわ！」

「こっちよ！」

無数の雨粒をすり抜けるように、乃々美の声が明瞭に響いた。

「うん！」

努めて明るく返す。

そうして二人は薄暗い森の中を走り続けた。

気が付けば森の高くまで登っていた。

何気なく視線を眼下に向けると道路が見えた。雨の所為か、地域柄なのかは判らないが道には人通りはなく、閑散としている。

「！」

ふとメルンの視界に人影が映った。遠目な為人影の顔は見えなかったが、その衣服はよく知っているモノだった。

(……あれは……勇輝と同じ服……)

要するに制服だ。

人影は傘も差さず、ただ無我夢中で走っている。メルンはその姿

に少なからず共感を覚えていた。

「どうしたの？」

やや離れた位置から乃々美が声を張り上げる。

立ち止まっている自分を氣遣ってくれているのだと氣付き、メルンは顔を向けて首を横に振った。

「ううん……なんでもないの。ごめんね、いま行
きや
っ!？」

急に踏ん張った所為で、ぬかるみに足を取られたメルンは抗う術もなく強かに転んだ。

「メルンちゃん!? 大丈夫!」

乃々美は弾かれたようにメルンの傍へと駆け寄った。

「……ごめんね……わたしなら平気……だから……」
明らかに痩せ我慢をしているのが判った。それでも頑なに笑顔を保っている。

乃々美はメルンの体を抱えて傷がないかを探した。

結果、メルンは右膝を擦り剥いていた。

「ダメよ。ほらここ、出血してるじゃない……。せめて止血しないと」

そう言って乃々美はスカートのポケットからハンカチを取り出し、慣れた手付きで巻いて丁寧に結んだ。

「これでよし っ!」

処置をし終わると乃々美は「ありがとう」と呟いた。

それはともすれば風の音かと思えるほどに小さな囁きだった。それでも乃々美の声は確かにメルンに届いた。

「? ……乃々美ちゃん……今なにか言った?」
やわらかく尋ねる。

だが乃々美は穏やかに微笑んだだけで、答えは口にしなかった。

「もう少しだけ……走れる?」

乃々美はおもむろに立つと、そっと手を差し伸べた。

「うん!」

答えると同時に乃々美の手を取り、優しく引き起こされた。

「行くよ！ 勇輝くんを助けに っ！」

決意を確かめるように叫んで、二人は再び走り出した。

勇輝がいる場所は 　もう目の前に迫っていた

乃々美とメルンが森に足を踏み入れた頃 　勇輝は、幼い頃よく遊んだ思い出の場所に辿り着いていた。

雨に打たれ全身が濡れそぼっており、途中で躓いて転んだのか、両手と両足にまだ新しい擦り傷が刻まれている。

どうやら手にしているプランターを庇った為のようだ。

「……ここが……あの時の……場所……」

雨音しか聞こえない薄闇の中、勇輝は記憶を辿るように呟いた。

両の瞳は虚ろで満たされている。その姿はまるで死人に等しい。

「……もう……ダメだよ。もう自分を支えるものが なくなっただんだ……」

続けて言葉を吐く。

悲しみに満ちた表情で、自らの心を眼前に広がる崖下へと投げ捨てるかのよう……。　

「ねえ、どうすればいい？ 　あの頃のような関係にはもう戻れないのかな？」

虚空に投げた勇輝の問い掛けは、しかし雨音に溶けて消えた。

答える者は居ない。

代わりに雨が一層強さを増した。

半ば自嘲的な笑みを零して 　今一度言葉を投げ捨てた。

「ごめんね。……このプランターには……何も植えられてなかった……」

それは心のどこかで薄々気付いていた可能性だった。
だが勇輝の意思はそれを受け入れることを頑なに拒んだ。
縋って居たかったのだ。
何かに。

それがどんなに儂くて弱いモノであったとしても……。

乃々美がそうであったように

勇輝もまた、心に弱さを抱

えていたのだ。

互いの弱さが

二人を遠ざけ続けた。

突然一筋の煌めきが勇輝の頬を伝った。それが涙なのか、雨なのか……もはや勇輝にすらわからない。

不意に勇輝は遠くで自分の名前を呼ばれた気がして、背後を振り返った。

だが気のせいだと思い直して向き直る。

目を閉じて意識を落とし込んだ。

直後に続く数十秒間は永遠にも思えた。

「……これで……僕のすべての……終わりにしよう……」

そう呟いた勇輝はプランターを手にした手を正面に伸ばし高く掲げた。

支えている手の力を抜こうとした

……

次の瞬間！

「ダメだよッ！ 勇輝くん！ 捨てちゃ……ダメだよ……ッ！」

「　　ツツ!?　　……乃々美……ちゃん?」

まったく予想だにしていなかった乃々美の声に、勇輝はかろうじて思いとどまった。状況が理解できないという表情を浮かべて乃々美を見据える。

「……勇輝……乃々美ちゃんの話　聞いてあげてほしいの」
「　　やや遅れて別の声が響いた。

「……メルン。……!　　……お前……その服……」

勇輝は目の前に佇む少女の姿を見て戸惑いを露わにした。

あれほど大切にしていたお気に入りの服が、無惨にも泥水に汚れてしまっていたからだ。

気付けば乃々美の制服も同じ状態にあった。

この雨の中を服が汚れることすらも厭わずに自分を捜してくれた二人の気持ちに、勇輝は胸がつかえる感覚を覚えた。

苦虫を噛み潰したように顔を歪め、辛そうに声を絞り出した。

「……もう話すことなんて……ないんだよ」

「……勇輝」

「……勇輝くん」

その重たい一言に、二人はただ、名前を呼ぶことしか出来ない。勇輝は手元のプランターに視線を落とし、ついに核心に触れた。

「これには……何も植えられてなかったんだよ……」

「　　つつ!」

刹那、衝撃が走った。

「　　いつか話すつもりだった……。けど、まさか勇輝くんが今もそのプランターを持ってるなんて知らなくて……。……ごめんね……。……私の身勝手で　勇輝くんの気持ちも考えずに……。……こんな酷い嘘までついて……。……私が弱い所為で、勇輝くんを苦しめてただね……。……」

嗚咽が零れ、言葉が途切れた。

振り払えない空気が場を支配する。

勇氣は二人を交互に一瞥すると崖の方へと向き直り、再びプランターを掲げた。

メルンはその様子を……息を呑んで見守っている。震える体を抱えて必死に耐えた乃々美は、しかし、何かを喋ろうにも思うように声が出ない。もどかしさだけが心の底で渦巻いている。

それでも乃々美は言葉を紡ごうと必死に抗った。

「……ねえ、聞いて、勇輝くん。……私ね、メルンちゃんと会ってまだほんの少ししか経ってないけど……話をしてやっと気付けたの……自分の弱さと本当の気持ちに　だから……今こそ伝えたいっ

そこで言葉を切り、胸に置いた手に力を籠める。

メルンに気付かせられた本当の気持ちを伝えるために臆病だった過去を断ち切り、思い出を守るために乃々美は勇氣を振り絞った

「……私は　勇輝くんのが大好きだよ　っ！」

乃々美が言葉を紡いだのと……

勇輝がプランターを手放したのは

……

同時

だった

刹那、二人の間にある時間は、まるで引き延ばされたかのようにひどくゆっくりと流れた。

永遠とも思える時間の中で、勇輝は確かに乃々美の声を聞いた。
そして乃々美は思い出を無へと帰した勇輝の背中に　小さな
手を伸ばしていた……。

やがて時間の流れが戻ると、乃々美は勇輝の背中に寄り添い、嗚咽を漏らしていた。

乃々美の温もりを背中に感じながら、勇輝はしばらく佇んだ。

自ら捨てたプランターに想いを馳せながら……。瞳に涙こそ浮かべているが、勇輝の心には後悔の念はなかった。

まるでそうすることしかなかったという風に、勇輝は虚ろな目で崖下を見つめ続けた。

やがて勇輝は乃々美の方へ振り向くと、妙に穏やかな口調で言葉をはいた。

「……乃々美ちゃんは悪くないよ……。僕が勝手に過去を引きずっていただけなんだから……。弱いのは僕の方……。乃々美ちゃんの気持ちはすごく嬉しい……。けど僕にはその資格は　ないんだ……。だから泣かないで……。キミが泣くと僕は……。とても悲しい気持ちになる……。から……」

あまりにも切ない勇輝の言葉に、乃々美は顔を上げて、覗き込むように問い掛けた。

「……やっぱりあの事を気にしているのね？　でも、あれは勇輝くんの責任じゃないんだよ？　みんなそう言ってる　あの子も天国からきつとそう言ってるに違いないわ……。だから、お願い……。自分をそんなに責めないで　っ！」

依然として振り続ける雨に打たれながら、乃々美は涙声で訴えた。

「……ごめん……」
しがみつく乃々美に対して、虚ろを貼りつけたような生気のない声で謝る。

「謝らないで……勇輝くん……お願い……謝らないで……　っ！」
メルンはふたりのやりとりを聞きながら、乃々美が言った言葉を

思い出していた。

『 子供が崖を転落する事故を起こして 亡くなったのよ 』

ある可能性がメルンの中で一本の線になって繋がった。

(だから 初めて会った頃の勇輝は…… あんなにも悲しそうな)

勇輝の心に見た 蕾 に絡み付いていた無数の 蔦 はここから来たものだったのだと、声には出さずにメルンは理解した。

(……これは勇輝自身が この痛ましい過去に勝たなければいけない…… わたしが出来ることなんて…… なにもないの……)

魔法花栽培師として勇輝を助けると誓った。

だけど苦しんでいる勇輝に対して、自分はなにもしてあげられない。

そう思った時、メルンはいかに自分が未熟者であるかを思い知らされることになった。不意にジエントの顔が脳裏に浮かんだ。

(ねえ、ジエント……わたしはどうすればいい？ どうすれば助けられるの？)

切実な想いを祈りにのせ、遠き地にいるジエントに問い掛けた。

当然ながら答えが返ってくることはなかった。

メルンが 乃々美が そして勇輝までもが、それぞれの心に深い絶望が落ちかけた……次の瞬間 ツ！

「勇輝イイツ！ テメエはいつまで過去を引き摺れば気が済むんだツツ！ いい加減、今に目を目を向けたらどうなんだツツ！？」

「…… ツツ！？」「……」

聞き慣れた声が薄暗い森に響いた刹那、三人の驚きが重なった。

一斉に同じ空間へと視線を走らせる。

？ 思い出の場所？ その入口ともいうべき道に佇んでいるのは、

何度か勇輝に絡んでいた長躯の男の子　　智也だった。
メルンは先に見掛けた人影が智也だったのだと、すぐに思い至った。

傘も差さず追いかけて来たのか、すっかり濡れそぼり、あちこち泥だらけだ。

荒い呼吸を静めるように何度か息を吐いて、智也は黙したまま勇輝へと歩み寄る。

「……………」

勇輝の口からは力のない声しか出てこない。

憤りに満ちた必死の形相を浮かべ、勇輝の目を凝視する。

「……………確かに俺はあの時、あいつを　　伊織いおりを突き落としたのは…

…勇輝……………お前だと思っていた　　」

核心に触れる言葉に勇輝は顔を悲しみに歪めた。

傷を抉るような光景に、乃々美が口を挟もうとした　　が、それ

は背後に感じた温もりによって阻まれた。

「乃々美ちゃん。辛いと思うけど、勇輝を信じて　　ここは耐えて

ほしいの！」

「……………メルンちゃん……………。うん……………わかったわ。　　勇輝くんを信

じるよ……………」

後半は勇輝に向けて、囁くように呟いた。二人の祈るような視線

は勇輝たちに注がれた。

「　　けどなア……………お前はそんな奴なんかじゃねえ！　　そうだ

るッ!？」

「……………違う……………あれは……………僕が……………僕がや　　ッッ!？」

僕がやったんだ、という言葉が言い終えるより早く、智也は勇輝の胸ぐらを掴み上げていた。不意に呼吸が遮断され、声が途切れた。

今にも爆発しそうな表情で勇輝の目を覗き込み、

「デメエ……………もういつペン言ってみるッ!？」

と激昂した。

勇輝が正直にもう一度言おうとする。しかし智也は先に言葉を発

してそれを制した。

「 テメエが勝手に罪の意識を背負い込んでもなア……誰も喜ばない それに、伊織だって浮かばれねェんだぞ!? あれは事故だったんだ。いい加減目を覚ましやがれッ! 」

すると智也は空いている右手に拳を作り、勇輝の頬を強かに打った。

「 ……ぐッ …… 」

襟元を掴んでいた腕が放された勇輝は殴られた衝撃に耐え切れず地に倒れた。

「 勇輝くんっ! 」

乃々美の悲痛な叫びが響く。

あまりの痛みに体を震わせて座り込む勇輝の胸ぐらを再び掴み上げ、そのまま引き起こした。

「 立てよ! 」

冷然と吐いた言葉は雨音しか聞こえない森によく響いた。

勇輝は力なく項垂れて、決して目を合わせようとはしない。重苦しい時間だけが刻々と流れていく。

身を打つ雨は止むことを知らず、なおも勢いを増し続けている。

「 ……俺が伊織の事を……好きだったのは知ってるだろ? 伊織が話す事はいつもお前のことだった……伊織はおまえのことが好きだったんだ! 」

智也は静かに、胸の内を話し始めた。

それは勇輝を長年苛み 目を背けようとしていたことだった。

「 それでも俺はどうしても伊織に振り向いて欲しくて……。あの日、ちゃんと自分の気持ちを伝えようと決心した その矢先だった……例の事故が起きたのは…… 」

「 …… 」

勇輝は黙したまま決して顔を上げようとはしない。

さらに話は続いた。

「 今思えば……あの瞬間を偶然目にした位置が悪かった……。あの

時、正直俺はお前に伊織を奪われたような　そんな絶望感に囚われていた。……だけどそんなモノは時が消してくれたんだ……」

言葉には深い感情が籠もっている。

「お前を見ていたら嫌でも陽咲のことが好きなんだとわかった。それは伊織も気付いていた。だからこそ……その気持ちをお前に告げなかつたんだろう。陽咲がお前を好きなことを知っていたから……。　　つたく……あいつらしいぜ」

智也の気持ちを知った勇輝は、ゆっくりと視線を上げた。

その瞳は涙に濡れ、赤くなっている。

「伊織はお前たちの幸せを願っていた。だから俺は……その願いを叶えてやるうと思つたよ。それが唯一できる手向けだからな。ところがどうだ！？　お前は勝手に罪の意識を背負って前を向こうともしねえ！　現実から目をそむけてるだけだ！　……そんな姿に俺は……俺は……ッ！」

無念に歯を軋ませ、掴んだ手を離すと、跪いて地に拳を叩き付けた。

「……智也……」

目の前で泣き崩れる友の姿に、勇輝は自分の中にあるありのままの気持ちを思い出した。

その瞬間……勇輝は己の弱さより、乃々美を想う気持ちが、僅かに上回った。

そして……

「乃々美ちゃん……僕もキミのことが……」

好きなんだ

ッッ！」

やっと告げられた　自分の気持ち。

ファン

同時に不思議な音が響いた。それをメルンは無意識の中で耳にしていた。

そして三人の顔に笑みが戻り始めた。

「……勇輝くん　っ！」

乃々美は込み上げる嬉しさを籠めてその名を呼んだ。

だが、勇輝が次に紡いだ言葉はなんと悲しい一言だった……。

「……プランターを捨てた僕にはもう　そんな資格はないよ……」

勇輝にとって乃々美からもらったプランターは最後の希望だったのだ。

植えられた種が花開いた時、勇輝の中にある罪を償えるのだと……。そして、その時こそ自分の気持ちを伝えようと……。そう思っていたのだ。

だが、勇輝の心を支えていたプランターは……。既に存在しない。再び重い沈黙が辺りを包み込んだ。

「……勇輝……」

メルンも只々……。少年の名前を呼ぶことしか出来ないでいた。突きつけられた現実から目を逸らすように、メルンは固く目を瞑った。

（おじいちゃん……ごめんね……この世界に　夢想花　は　！?）

この世界に　夢想花　は無い、と心の中で呟こうとした瞬間、メルンの意識は確かに懐かしい温もりを捉えていた。

「これは…… 夢想花 の気配 っ！」
目を見開いて意識を集中させる。
メルンの視線が勇輝に向けられたその時 それは確信へと変わった。

出会ったころ勇輝の中にある 夢想花 は、無数の 蔦 によって開花を阻害されていた。だが、今は違った。メルンは勇輝の心の中に美しく咲き誇る 夢想花 をみたのだった。小さくとも確かな輝きを持ったそれは、乃々美と智也の心にも波及していった。

そして その直後……メルンは驚くべき光景を目の当たりにする。

三人の心に宿っている 夢想花 以外に、複数の気配を感じていたメルンは、数歩崖へと歩み寄りその先を覗き込んだ。

「！」
あまりの驚きに声すら出ない。

メルンが目にしたもの……それは
なんと崖の下から無数の淡い光が生まれていたのだった。
それはゆっくりと上昇している。

メルンは喜びに満ちた表情を浮かべて一際高い歓喜の声を上げた。
「見て、勇輝！ 夢想花 が咲いているよっ！」

メルンの声に勇輝はゆっくりと振り返った。
淡く輝く 夢想花 を目にした途端、まるで憑き物が落ちたように澄んだ笑みを浮かべた。

乃々美と智也も非現実的な光景に見入っている。

「……これが…… 夢想花 ……。キレイだな……」

「うん！ これは勇輝が育てた 夢想花 なの！」

「……え？ ……僕が……育てた？」

よくわからないといった様子で勇輝はメルンの顔を見つめた。

するとメルンは屈託の無い笑顔を返してから穏やかにこう告げた。
「そうだよ。この 夢想花 はね……あのプランターの中で育てていたの！」

「え！？……本当に？」

意外な答えに戸惑いを隠せない勇輝はその真偽を問うた。
だが返って来る答えは変わらなかった。

「本当なの！ 勇輝がありのままの気持ちは伝えられたから
夢想花 はそれに応えたの！」

「……ありのままの……気持ち……」

そう呟いて勇輝は乃々美へと顔を向けた。

勇輝の問い掛けるような視線を受けて、乃々美は涙を拭いながら
静かに頷いた。

再びメルンへと向き直る。

無数の 夢想花 を背に、メルンは両手を広げて一回転し、

「これは勇輝がみんなを想い続けた証なの！」

と満面の笑みで告げた。

不意に勇輝は 夢想花 の奔流へと目を向けた。

まるでその空間に誰かがいるような そんな様子に三人は固唾
を呑んで見守った。

儂い光を放ちながら浮かぶ 夢想花 の中に勇輝は誰の姿を見た
のか 幾度か口を動かしている。どうやら話しをしているようだ
と誰もが思った。

会話が進むにつれ、勇輝の表情に笑顔が戻っていく。

姿無き者とのやりとりはものの数分で終わりを迎えた。

だが、話しを終えた勇輝の顔はこれ以上ないほどの穏やかさに包
まれていた。

その瞬間、勇輝の心から 長年勇輝を苛んでいた罪の意識が消
え去ったのだった。

勇輝は眼前へと手を伸ばし、両の手の平いっぱい 夢想花 を
包み込んだ。

そしてゆっくりと振り返るとメルンへと数歩歩み寄った。

「メルン……あの……なんて言うか、その……」。 あり
がとつ

照れ笑いを浮かべながら、なんとかその一言を紡いだ。

「うっん……わたしは何もしていない　勇輝が頑張った結果なの！」

涙声で返す。

心地よくも切ない沈黙が降りる。

二人の脳裏には同じ思いが生まれていた。

それは　別れだった。

メルンは遠き異世界の地にいる大切な人を助けるべく、この世界に　夢想花　を求めてやってきたのだった。目的の　夢想花　が見つかった以上、この世界に留まっている理由は無い。それは勇輝も理解していた。

だがいざ別れが近付くと、短い間ながらも、共有した時間が走馬灯のように駆け巡る。

先に沈黙を破ったのは勇輝だった。

手の中にある　夢想花　を確かめて、メルンの前に差し出した。

「……はい……。これで帰れるんだろ？　大切な人を助けられるんだろ？　だったらこれは　メルンにもらってほしい！」

そう告げてメルンの小さな手を取ると、そっと　夢想花　を手渡した。

探し求めた　夢想花　を手にしたメルンは、とても大切そうにそれを包み込んだ。

「ありがとうなの。短い間だったけど勇輝と出会えて楽しかったよ。久しぶりに家族の温かさを感じることが出来た　友達の大切さも

……ね」

「……ああ、僕もだ。まるで妹ができたような感じだったよ」

するとメルンはぶくうと頬を膨らませて「子供扱いしちゃ嫌なの！」と抗議の声を上げた。勇輝は含み笑いで誤魔化した。

気持ちを落ち着かせるようにメルンは何度か深呼吸をした。流れ落ちそうな涙を必死に堪えながら、静かに口を開いた。

「……もう少しだけ一緒に？　がっこう？　に行きたかった……もう少

しだけ一緒にごはんを食べたかった……もう少しだけ一緒に？えんげいぶ？をしたかった……もう少しだけ…… 勇輝と一緒にいたかった

終いには瞳から涙を溢れさせ、赤く染まった頬を濡らした。

勇輝は込み上げてくる感情のままに、メルンの小さな体を抱きしめた。

「ふえっ!？」

突然のことに驚きの声を上げたメルンだが、すぐに身を委ねた。

「……温かい……。……温かいよ……。勇輝……」

雨で冷えた体を温めるように、二人はしばらく身を寄せ合った。

やがて抱いた腕を放したメルンは乃々美と智也の方へ顔を向けた。

「乃々美ちゃんもよく頑張ったの！ ありがとうなの！ 智也

くん……これからも勇輝と友達でいてあげて欲しいの！」

それぞれに別れの挨拶を告げた。

「……ううん、私の方こそお礼を言わせて。メルンちゃんのお陰で自分の弱さを乗り越えることができたんだから！ 今日のこの気持ち 私、絶対に忘れないから！」

「キミが勇輝を支えてくれたお陰で、俺たちは思い出を守ることが出来た。任せときなつて！ 勇輝の面倒はこの俺がよく見ておくからよっ！ ……サンキューな！」

そして遂に別れのとかが訪れた。

メルンは 時の花 に動力源である 夢想花 を同調させて再起動に成功した。

崖の上に立ち、三人を見渡す。

「これでお別れだね。本当に 本当にありがとう……勇輝のこと、乃々美ちゃんのこと、智也くんのこと この世界で出会ったみんなのことは絶対に忘れないよ！」

「ああ、僕も忘れないよ！」

「私も忘れないからね！」

「落ち着いたらまた来てくれよなッ！俺たちはいつでも大歓迎だぜ！」

それぞれが思い思いの言葉を紡ぐ。

次第にメルンの体が眩い光に包まれ始めた。

「うん！きつと きつとまた来るの！……その時まで

」

そこでメルンの姿は、無数の花びらとなって空へと昇っていった。淡い光を放つ 夢想花 に見送られるように……。その光景はなんとも美しいものだった……。

しばらくして空から優しい音が降り注いだ。

いつてくるね

やがて 夢想花 の光は空に溶けて消えた。

「いつてらっしやい……」

空に向かって、囁くように言葉を贈った。

勇輝はメルンがいなくなったから 夢想花 が見えなくなったのかな、と独り思いを馳せた。

けれど、勇輝はメルンの言葉を思い出していた。

かつてこの地球には無数の 夢想花 が咲き誇っていたのだと。それが見えなくなってしまったのは、今の時代に生きる自分たちが、他人を思いやる心を忘れてしまっている所為なのではないか。そう勇輝は考えた。

次にメルンがこの世界を訪れた時には、メルンが最初 心に懐いていたような世界になっているようにしよう 勇輝は遠き異世界の地にいるメルンに向けて一つの決意をしたのだった。

夢想花　の光が消えた頃、いつしか雨は止んでおり、勇輝たちの頭上には澄み渡るほどの蒼穹が広がっていた。穏やかな陽光が森を照らし出す。

その光景はまるで、勇輝たちがこれから歩む、輝かしい未来の兆しのようなもあつた。

三人は互いに顔を見合わせて、晴れ渡った蒼穹を仰ぐと、新たな未来への一步を踏み出した。

「行こう！」

勇輝が先頭を切つて声を掛ける。

「うん！」

「おう！」

叩けば鳴る鐘のように、快活な声が返ってきた。

「……なあ。……先生、怒ってるかな？」

残る二人の心境を、勇輝が代弁した。

それこそ、勇輝たちが輝かしい未来に辿り着くために越えなければならぬ、最初の試練だった。

昼休みに学校を飛び出した三人は今、午後の授業を無断欠席しているのだ。当然今頃は担任を始め、同級生たちも総出となって勇輝たちの行方を捜しているに違いない。

どう説明すればいいものかと悩んでいると、自然と足取りが重くなつていく。

だが

（このくらいでめげてちゃ、メルンに笑われるよ　そうだろ？

メルン　）

そう思い直して勇輝は地を蹴る足に力を籠めた。

「ちゃんと話し合えばきつと解つてくれるよ　行こう！　学校ま

で競争だ！」

勇輝の声に乃々美と智也も同時に駆け出した。

それはまさに、彼らが昔、仲良く遊んでいたころの光景が再現されたかのようであつた。

以前のような弱気がなくなった勇輝の姿を見て、二人は穏やかに笑い合い、勇輝の後に続いた。

三人が走り去ったあとには、淡い光が浮かんでいたのだった……
……。

時の花の力により、無事、元の世界に戻って来れたメルンは、すぐさまジェントが待つ家へと走った。

魔法屋兼住宅の扉を勢いよく開き、ジェントの寝室へ入る。

看病時間外なのか、連絡を取っておいた筈の医者姿はそこにはなかった。

だが確かに世話をしていた痕跡があったため、メルンは一安心した。

「おじいちゃん！ 遅くなったのでも、ほら…… 魔法花はちゃんと見つけてきたよ。すぐに魔法薬を調合するからね！」
そう伝えると、メルンは独りジェントが仕事場として使っている調査室へと向かう。

メルンは資料を片手に 魔法花 を調合していく。

ふと、勇輝の住む世界のことを脳裏をよぎった。

今こうしてジェントのために 魔法薬 を作っている光景が、いつの日だったか、勇輝に朝ごはんを作ってあげた光景と重なったのだ。

すると肩に入っていた余計な力が抜けて、難解に思えた 魔法薬 の調合もスムーズに運んだのだった。

「 完成なの！」

出来上がったときの歓声まで同じだったので、メルンは思わず笑い声を零した。

調査した 魔法薬 を持って驚くほど軽い足取りでジェントの寝室へと向かった。

「 魔法薬 なの。……飲んで、おじいちゃん」

メルンに介助されながらジェントはなんとか 魔法薬 を口にしたら。

途端にジェントの顔色が良くなり、呼吸も落ち着いていた。

その様子にホッと安堵の息をつく。

ベッドの横に座り込むメルンの姿を視界に映し、ジェントは静かに口を開いた。

「……メルンや……ありがとう　助かったよ」

まだ全快ではないのか、声には若干の苦しさが滲んでいる。

それでもジェントは感謝の意を述べた。

メルンは優しい笑みを浮かべてジェントの手を取った。体温を確かめるように力を籠める。

「……間に合ってよかったの……早く良くなってね、おじいちゃん　囁くように紡いだ言葉はジェントの心に優しく響いた。

するとジェントはもう片方の腕を伸ばして、そっとメルンの頭に手を置いた。

「……メルンや……異世界を訪れて……随分と……成長したようじやな……。もし……良かったら話をしてくれんか……。？　……お主が……異世界の地で……何を見て……何を感じ……何を成したのかを……」

消え入りそうな声で絶え絶えに紡がれた言葉を、メルンはしっかりと受け止めた。

そして満面の笑みで「もちろんなの！」と返すと、ジェントのベツドへともたれかかった。　と、その時。

メルンは服の内側に違和感を感じ、上着のポケットへと手を入れ何かを取り出した。

「！」

取り出した物が目に入った途端、メルンは驚きを露わにした。

「　返すの忘れちゃったの……」

それは恭子から預かった一枚の写真だった。

智也と

伊織と

乃々美と

そして……勇輝が

屈託のない笑顔で、四人仲良く映っている写真

「……どうかしたかの……メルンや……」

ジェントの催促するような声に意識を引き戻されたメルンは小さくかぶりを振った。

「……ううん。なんでもないの」

そう返すと「じゃあ……」と前振りをした。

「お話するね

ソルニムキュルテイスト
魔法花栽培師メルンの物語を

」

こうしてメルンは魔法花栽培師としての一步を踏み出した。

今はまだ小さな一歩だけれど、それがやがて軌跡となり 理想

の未来へと続く道を切り拓く力となる。

この世界を

勇輝たちが住む世

界に負けないくらい

夢想花 に溢れる世界にしよう

そう、メルンは心に誓い、静かに語り始めたのだった……

了

これにて完結でございます。

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

ちょっと設定の練り込みが足りなかったかなーとか、主人公であるメルンがちょっと何もしなすぎたかなーとか、色々反省点が残る作品であります。

章タイトルに英文を組み込んでる辺りなんか、危なっかしい若さを感じますよね（笑）これは当時（多分）読んでた『ウィザーズ・ブレイン』の影響だったと思います。

まあ、あくまでメルンをきっかけとした、ゲスト的主人公たちの物語が中心だと言ってしまえば、それはそれでありなのかも知れませんが……。

こういう話も個人的には好きな部類なので、殺伐とした物語が続いた時には、無性に書きたくなります。

あれです。MTGでビートダウンばかり使つてると、たまにはカウンターを使いたくなるあれと同じです。多分（笑）

ともあれ、時を遡りつつの掲載も三作目となりました。次は現在に近づくか、さらに遡るかは……未定です。

ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7285s/>

魔法花栽培師メルンの物語

2011年4月25日01時01分発行